

終わりの夢

渡辺たづ子

砂漠の夢 1

事務局からそのクライアントの話が来た時、絵里はすぐに返事が出来なかった。「年齢は三十歳、未婚の男性です。日中は家業のコンビニエンスストアを手伝われています。去年、妹さんが亡くなられて、それ以来、鬱状態が目立っております。出て、こちらは連絡してこられました。仕事の都合上、面接は夜を希望されていますが、先生のご都合はいかがでしょうか」

絵里が所属しているメンタルケア事務局は、出張カウンセリングを特徴としていることもあって、クライアントは年配者が圧倒的に多い。これまで絵里が面接した相手は、みな六十代以上だった。

彼らは話し相手を求めている孤独な老人達だった。協会の

取り決めである週に一度、一回につき九十分という面接の枠では物足りない、帰り際に絵里の手を握る老人もいた。しかし今度の相手は三十歳、自分より十五歳近く若い。「オファーはお母様からということですが、ご本人は納得されているでしょうか」

本人以外からの依頼というのも初めてだった。

「消極的な賛成、というところではないでしょうか。はつきりした言葉が使われたわけではないのですが」

事務局員が応える。

「消極的な賛成、ですか……」 積極的な反対、反対、消極的な反対、どつでもいい、消極的な賛成、賛成、積極的な賛成、こんなふうに関頭の中に図式を作ってみると、消極的という言葉が持つ否定的な響きが薄れていく。

消極的な賛成、結構じゃないか。

「分かりました、お受けします」

返事をしたその日のうちに、クライアントの自宅地図と初回面接日、時間が記載されたファックスが入ってきた。自宅のある駅から目的地までは、電車で約四十分かかる。その長い距離は、かえって有難い。

絵里はいつも、クライアントに会いに行くための電車に乗った瞬間から、面接の準備を始める。これから会う人の為に、自分の中から自分を追い出しにかかるのだ。抱えている問題をかき集めて、いったん隅に置いておく。そうやってその人

のための場所を作り、広げていく。今回はその準備に、四十分という時間が用意されているということだ。

佐藤健一。

ファックス用紙に書かれたクライアントの名前を、絵里はじつと見つめる。そしてその青年の心に広がっているだろう間に、思いを巡らす。

砂漠の夢 2

商店街の中に、佐藤健一の家はあった。父親が経営しているコンビニエンスストアの裏手が住まいになっている。約束の午後七時少し前に玄関のブザーを押すと、ドアを開けたのは老人だった。「はじめまして。メンタルケア事務局からまいりました中山と申します」

型どおりの挨拶をして、事務局からの身分証明書を示すと老人はそれを受け取って眼鏡をはずし、目を近づけてじつと眺めた。それからまた眼鏡を掛けて、今度は絵里を見つめた。「あんた、この人かい？」

証明書に貼ってある写真を指差す。

「はい、そうです」

事務局から渡されている資料の中には、健一の実居人データも記されてある。

父・篤志五十九歳 母・美知子五十六歳 祖父・芳造八十

三歳。

「そつは見えねえなあ、写真よりほんもんの方がずつと別嬪だに」

芳造は真白な入れ歯を剥き出しにして笑った。

その時、廊下に面したドアが開いて中年女性が顔を出し、あわてて老人に駆け寄った。

「おじいちゃん、お客様に失礼じゃないですか。すみません、先生、さあ、どうぞ」

健一の母、美知子だった。整った顔立ちをしている。

通されたのは玄関脇の応接間だった。

「健一の母です、本日は遠くからありがとうございます。主人と相談して、先生のお力を借りようということになりました。家族とは口をききませんので、どうしようもないのです」

美知子は深く頭を下げた。

「健一には、先生が今日いらつしゃると、今朝になって話しました。前もってそついう方が来てくれるかもしれないとは言っておきましたが、あまり詳しく話しませんでした。不眠もあるようなので、気に病んで本人の負担になってもいけないと思ひまして」

話の内容は切実でも、あまり切羽詰った印象がないのは、彼女が持つことなくおっとりした物腰からきているのかもしれない。

「健一さんは、面接をいやがっておられますか？」

「いえ」美知子は首を横に振る。「会っだけは会おうと言っています、すみません。今、本人を連れてまいりますので」美知子は立ち上がり、一礼して静かにドアを閉めた。絵里は座り直して、呼吸を整える。
やがて、静かにドアが開いた。

砂漠の夢 3

入ってきたのは青年だった。背が高く、聞いていた三十歳という年齢よりも若く見える。まだ学生のような雰囲気が残っているのは、伸びた髪の色いかもしれない。彼はその場で一礼すると、向かいのソファに腰を下ろした。高い鼻やくつきりとした上唇の形が母親とよく似ている。「はじめまして、中山です。佐藤健一さんですね。お母様からのご紹介で伺いました」

あまり堅苦しくならないように、声のトーンを少し上げてみる。

「はい……」 咳くように応えて、健一は、膝の上に落としていた視線を一瞬こちらに向けた。

思ったほど暗くはない。絵里は少し安堵する。もっと沈んで頑なな光りを持った瞳に接したこともあったが、これまで面接を中断されたことはなかった。

事務局の取り決めとしては、面接は週一回で九十分、五回がワンセットになっている。五回分の料金を前払いされてか

ら面接が始まるのだ。中断されても料金は返却されないシステムになっているが、先輩に聞くと、これまでトラブルはないとのことだった。

「どうですか、最近は」

俯いている青年に、絵里はさり気なく切り出す。

「どうして……」 健一は顔を上げ、戸惑ったように咳く。そして一瞬絵里を見て、また膝の上に視線を落とした。

「あまり眠れないようだ」と

言葉を区切って、相手の返事を待つ。しばらく待っても、

健一からの返事はない。

「調子はよくないですか？」

問いかけると、

「そうですね……」 ようやく少し顔を上げて口元を少し緩めるが、俯いている時は、ほとんど表情がない。

「眠るのは大変ですか？」

重ねて尋ねると、

「そういう時もあります」

しばらくして、ぽつんと言葉が返って来る。

「昨日はいいかがでした？」

またしばらくの間

ふいに壁に掛かっている鳩時計が鳴った。

「あまり……」 それを合図にしたように、健一が口を開く。立ち止まって、時々交互に足踏みをしているだけだ。全く

会話にならない。

砂漠の夢 4

これまで絵里が接した相手は、こちらが一言切り出すと堰を切ったように話し出すのが常だった。お金を払ってまで人と話したい、そんな切実な思いを持った老人がほとんどだった。絵里はただ、そんな相手の気持ちを受け入れて、静かに相槌を打ってあげればよかった。しかし今、自分の前にいるこの青年は、ほとんど言葉を発してくれない。事務局に面接を依頼してきたのは彼の母親だった。彼はただ、母親への義理を果たすためにだけ、この場に座っているのかもしれない。

「眠れない夜はどうしていますか？」

質問ばかりだ。

絵里は自分がこれまで発した言葉を思い返しながら、うんざりしていた。全くなっていない。

そんな気持ちを通じたのだろうか。健一はふと顔を挙げ、まるで憐れむかのように、口元を少し緩めた。微笑とも冷笑ともつかない笑いだ。

もうやめた。

絵里は覚悟を決めた。相手から言葉を引き出そうなどと思わなければいいのだ。

絵里はすく前にある健一の肩の辺りに視線を当てた。呼吸

と共に、肩が微かに上下している。その動きと自分の呼吸を合わせてみる。何度か繰返しているうちに、健一と自分の呼吸が合ってきたのが分かった。

時間がゆっくりと過ぎていく。

健一が膝の上に置いた手を組替えた。絵里も同じように膝で軽く組んだ手を解いて組替える。健一が固くなった筋肉を解すように、肩を軽く回すような仕草をした。絵里も同じように肩を回す。

健一がこちらを見た。絵里はその視線を受けとめる。

その唇が微かに動いた。

「かんがえます」

言葉は耳に入ったのだが意味が分からず、絵里は咄嗟に聞き返していた。

「はい？」

「眠れない夜は、考えます」

健一は、さっきより声を上げてゆっくりと言った。

彼の言葉を心の中で繰返してから、ようやくそれが、さきほど自分が発した問いかけへの応えだと気がついた。

眠れない夜はどうしていますか？

眠れない夜は考えます、と彼は言っている。

「どんなことを？」

絵里が訊く。

「妹のことを。彼女がみた砂漠の夢のことを」

健一は心えた。

砂漠の夢 5

健一が鬱状態になったきつかけは、妹の死だと聞いていた。彼の中では、妹がとても重要な位置を占めているのだろう。

「妹さんは砂漠の夢をみたんですか？」

絵里が訊くと、

「ええ、何度も」

健一は口元だけで微笑んだ。すると彼の顔に血が通い始めたように、表情が現れてきた。

「同じ夢を？」

「そう、繰返し、繰返し……」 その夢を思い出すかのよう

に、うつすらと笑みを浮かべる。

「同じ夢を見続けるなんて、不思議ですね」

「そういう経験ありますか？」

「……ないと思います」「うつうつ話 嫌いですか？」

「いいえ、むしろ好きです」

「そうですね……」 健一は安心したように咳いてから、

話してもいいですか？」

遠慮がちに訊いてきた。

「ぜひ、聞かせてください」

絵里が心えると、

「内容自体はつまらないと思えますけど」

そう言って彼は、小さく一つ咳をした。

「妹は、テントの中で寝ているんです」

彼は自分の言葉を確認するように頷いた。

「そこは砂漠のまん中です。真っ暗で何も見えません。音が聞こえるだけです。風と砂の音。遠くから砂嵐がやってきます。」

妹はテントの中で一人横になって、その音を聞いています。

巻き上げられた砂の音は、段々とこちらに近づいてきます。

まっすぐ、こちらに向かって進んでいきます。やがて、ついに彼女が寝ているテントの上に砂が掛かり始めます。

埋まってしまう。

彼女はその時、いつもそう確信します。生きたまま砂の中

に埋められて、わたしはゆっくりと死んでいく。苦しみながら。

それがはつきりと分かるんだと、妹は言っていました。

どこにも逃げ道はない。彼女はきつく目を閉じて、ばらばら

とテントを打ちつける砂の音を聞いています。音はしだいに

激しくなる。だんだんとテントが砂の中に沈んでいくのが分

かる。そしてついにテントは砂の重みで崩れ落ちる……。

で、その先はどうなると思いますか？」

健一は絵里の顔をまっすぐに見た。

砂漠の夢 6

「ああ」「ああ」 絵里は首を傾げる。

「そこは、それで終わりなんです」

「目が覚めるの？」

「いえ、場面が変わるんです」

健一はまた一つ、小さく咳をする。

「彼女は何か抱きとめられているんです。大きくて柔らかい何かに。でも、目を閉じているからそれが何なのか、そこが何処なのか分からないのだそうです。でももう砂漠のテナントの中じゃない、とても安心できる場所だと、こここそ自分がいるべき場所だと、確信できる。夢はそこまでです。」

だから彼女はいつも、目を開けたいと言っていました。今度あの夢をみたら、きつとここで目を開けるのだと、妹はいつも悔しがっていた」

砂漠の夢？

健一の口からこの言葉が初めて出た時から、実は、絵里の中で何かがずっと引つ掛かっていた。

砂漠の夢というのを、自分もどこかで聞いたことがあるような気がする。

「あなたは、……えっと、先生は……」 健一が言った。

「中山、です。そう呼んでください」

「中山さんはこの夢を、専門家にとっては解釈しやすい夢だと思っっているんじゃないですか？」

「私は心理療法をしているわけではないです」

「夢の解釈とかはしないんですか？」

「そういうことはしません。基本的には、専門的な知識を持つて、お話を傾聴するということですが」

「……そうなんですか」 健一は拍子抜けしたようだった。

「例えば何かに名前をつけたり、意味付けをしたりすると人間は安心するものでしょうけれど」

「ええ、そういうことをしてもらえるのかと」

「もし、お望みならば、事務局には横の繋がりもありますから、違う方も紹介できます。ただし、佐藤さんの方から出かけていくということになります」

そうですか、と健一は俯いた。今の彼にとって外出は大きな負担なのだろう。

「佐藤さんがその砂漠の夢に拘っていらつしやるのなら一緒に拘りますと、私はそういう者です」

もう規定時間が過ぎていた。来週の確認を取らなければならなかった。

「もし私でよろしければ、来週もお伺いしますが」

「はい、分かりました」

やがて決心したように顔を挙げ、健一は頷いた。

砂漠の夢 7

佐藤健一の初回面接を、何とか次回に繋げて終わらせることができて、絵里はほっとしていた。これから先の面接で

は、その砂漠の夢について彼と一緒に考えていかれればいい

と思う。

「終わったかい」

玄関を出て歩き出したところで、突然、後ろから声を掛けられて、絵里は飛び上がるほど驚いた。

「うちの孫はどうだい？ 病気がい、やっぱり」

健一の祖父、芳造だった。

「あ、先ほどの……」 佐藤家の玄関のベルを鳴らした時ドアを開けてくれたのが彼だった。

「孫はどうだね、治るかい」

「さあ、私は医者ではないので」

「あんた、医者じゃないんか？ じゃ、何しに来なすった」

「何しにと言われましても……」 どう応えていいのか迷っている。

「さつき美知子さんが先生と呼んでたから、てっきり医者かと思ってたわ。あんた、学校の先生かい？」

芳造は玄関のやりとりを思い出しらしく、重ねて訊いてくる。

「いえ、そつではないのですが」

「役場が保健所の人かい、健一を入院させるんか？」

「いえ、そんな……」「そつかい……、まあ、なんでもいいや」 老人は大きく一つ溜息をついた。

「さつき名刺見せてもらったが、わしは目が悪くて小さい文字は読めんからなあ。あんた、健一を何とかしてやってくれ

や」

「私は何も……ほんの少しお役に立てればいいかと」「ちいせえ頃はじいちゃん、じいちゃんつてよくオレんとこ来たもんだつたが、今じゃ声かけても返事もしねえや。あれじゃあ、死んでるもおんなじだ。頭もよくて、難しい大学を出て、いいとこに就職しても、ああなつちまつ。あれの妹にしてもなあ……。先生、ひとつよろしく頼みます」 芳造に深く頭を下げられて、絵里もあわててお辞儀した。顔を挙げると、老人はまだ頭を垂れていた。

「お力になれるといいんですが」

「また来てもらえるかい」

「ええ。また来週の火曜日、同じ時間に伺いますので、こちらこそよろしく願います」

芳造に一礼して、絵里はその場を離れた。しばらく歩いてからふと振り返ると、老人はまだ同じ場所に立つてこちらを見送っていた。

砂漠の夢 8

佐藤健一の面接を終えて家に着くと、夜十時を過ぎていた。「ただいま」

居間でテレビを見ている夫の寛に声を掛ける。夫は自宅近くのビジネスホテルに勤めていて、今日は早番だった。ちょうど家を出る絵里とすれ違いになるので、出掛けに夕食を用

意しておいた。それがまだ手付かずのままになっている。

「ご飯 食べなかつたの？」

「ああ」

サッカー中継から目を離さずに心える夫は、いつものように焼酎をウーロン茶で割って飲んでいゝ。

「一緒に食べる？」

味噌汁を温めながら聞くと、寛は首を横に振る。

今日もずいぶん飲んでいゝ。その動かない背中を見ていゝと、この先どうなるか不安になつてくる。

結婚して二十年になるが、子供はいない。まだ若い頃は母親というものに憧れた時期もあつたが、寛が積極的に子供を欲しがらなかつたので、何となく過こしているうちに、母親になるには年を取り過ぎてしまつた。

寛とは、絵里が大学二年の夏休みにアルバイトをした軽井沢のホテルで知り合つた。絵里より三歳年上の彼は、そのホテルの従業員として働いていたが、自分の本職は画家だと言つた。

「絵を描きながらあちこち旅をしてるんだ。軽井沢が何となく気に入つてここに二年も住んじゃつたけど、夏が過ぎたら沖繩に移る。沖繩のホテルで働きながら海の絵を描くよ」

寛の両親は彼がまだ小さい頃に離婚して、以来、母親と二人で暮していた。彼が高校生の時に、母親は病死していゝ。

親戚の援助で学校は卒業したが、それからはずっと一人で気

ままに暮らしてきたと彼は言つた。

その頃の絵里は、生きていくことをとても窮屈に感じていた。だから寛という人間が、自由の象徴のように思えた。

「寂しくなるわ、せつかく友達になれたのに」

「手紙書くよ、働くところが決まつたらすぐに知らせる。君も大学が休みになつたら来ればいゝ」

「沖繩は遠いわ、旅費だつてないし」

「じゃ、切符は送つてやるよ」

そんな話をして別れたのだったが、本当に沖繩行きの航空券が届いたのには驚いた。

「約束は守るさ」

電話のむこうで笑つ寛が、とても頼もしく思えたものだった。

砂漠の夢 9

寛とは三年間付き合つて結婚した。家族の反対を押しきつたことだつた。「バカだバカだと思つてたけど、まさかこれ程だとはな。あんな男と一緒になつて、この先、迷惑だけはかけないでくれよ。いいか、俺はお前にきちんと言つたからな、覚えておけ。お前は将来、何があつても、絶対に俺を頼るな」

兄が放つた言葉を、二十年経つた今でも、絵里ははつきりと覚えていゝ。

五歳違い、二人だけの兄妹だったが、絵里は小さい頃からこの兄に親しみを持ったことはなかった。兄は小学生の頃から、成績は常にトップだった。たいてい自室にこもって勉強したり本を読んだりしていたから、一緒に遊んだ記憶もほとんどない。彼は難関といわれる国立大学を出て、大手銀行に勤務していた。

「一流大学出ていい会社で働いて、それが全てなの？人それぞれみんな違うのよ。お兄ちゃんは自分の学歴や職歴を大事にすればいい。それはそれでいいよ。でも、こっちにまで自分の価値観を押しつけないでよ。何が大切なんで、人それぞれみんな違うんだよ」

絵里は感情的になって、そう言い返した。それまでは、喧嘩すらしたことがなかったのに。

「じゃあお前は何が大事なんだ、言ってみろ」

「好きだっという気持ちだよ」

一瞬ためらったが、絵里ははつきりと答えた。

「バカだ、おまえは」

兄は吐き捨てるように言っ

て、「気持ちだっって？ そんなもので一生暮らしていけるか。いいか、十年、いや、五年経って俺の前で同じこと言ってみろ、そしたらお前の言ったこと、少しは考えてみてもいいぞ」

両親の離婚と母の死を経て、高校は卒業しているが、寛は定まった職業に就いていなかった。あちこちのホテルでアル

バイトをしながら、気ままな放浪を繰返していたのだった。「お兄ちゃんはそのように思っただけいい。私たちは誰にも迷惑はかけないから」

「その言葉を忘れるなよ」

父母の考えも、だいたい兄と同じだった。

市役所勤めの父と専業主婦の母は、生活の安定がなければ幸福はありえないというのだった。そして、そう言う彼等にとつての幸福とは、他人の賞賛だった。他人がこちらをどう見るかということが、彼らの価値観の基準だった。だから兄は、彼らにとつては幸福そのものだった。

絵里はそついつ家庭に育った。

砂漠の夢 10

子供の頃、絵里は兄のようになりたいと思っていた。勉強がよくできて、優秀という言葉そのもののようなお兄ちゃんみたいになって、親に褒められたい。そして、兄に対してしか向けられない誇らしげな母の笑顔を独占したいと願った。「クラスで一番だったんだよ」

絵里が得意の国語で最高点を取っても、

「算数はどつだった？」

母はそう聞き返すのだった。絵里には、親を満足させるような成績は取れなかった。

「お兄ちゃんはいいんだけど、妹がねえ……。元気なだけが

取柄で」母は誰かに兄の成績を褒められると、謙遜のつもりか、よくそんなふうには絵里を引き合いに出したものだ。絵里は家の中で、いつも自分の居場所を探していた。寛に惹かれ、家族の反対を押しきって結婚したのは、彼に自分と近いものを感じたからかもしれない。

両親の離婚後、一緒に暮っていた母親が亡くなったのは寛が十六歳の時だった。高校を出るまでは親戚の家にいたが、その後はずっと一人だけで生きてきた。寛が一箇所に居続けずに放浪を繰返すのは、自分の居場所を探しているからだろうと、絵里はそう理解していた。

結婚を機に、しかし、寛は一つの場所に定住することを約束してくれた。

「これまでやってきたキャリアを生かして、ホテルマンとしてきつちりとやっていくよ。しっかりと稼いで、キャンピングカーを買おう。あれがあれば休日には絵を描きに遠くまで行けるからな。そのうち子供が出来たら、テントを積んでみんまで行こう」

しかし、キャンピングカーも子供も、寛の空想だけで終わってしまった。

彼はもともとが酒好きだった。ホテルの業務には早番と遅番があり、就寝時間が不規則になる。眠るための睡眠薬代わりだと言っていた酒の量がしだいに増えていくうちに、オフの日には朝から飲むようになっ

飲み始めは陽気な酒で、絵里を呼んで向かいに座らせ、ホテルに来た風変わりな客の話などを始めるのだった。本もたくさん読んでいたから、寛は話題が豊富だった。

「今日は昼から映画行くんだから、あまり飲まないで」
「分かってるって、何度も言っ

たよ」
そんな会話が成り立っている頃は、しかし、酒量はまだそれほどでもなかった。

砂漠の夢 11

二十年前、寛との結婚を反対する家族に、「好きだったという気持ち」を大事に生きていきたいと絵里は言い切った。「気持ちだっ

て？ そんなもので一生暮らしていけるか。いや、十年、いや、五年経って俺の前で同じこと言ってみろ、そしたらお前の言ったこと、少し考えてみてもいいぞ」
兄にそう言われたが、しかし、五年どころか三年後にはその言葉を思い出すようになっていた。もしかしたら絵里の結婚は、三年で破綻していたのかもしれない。

寛の酒量が増えてくると、当然、翌日の仕事に影響が出てくる。結婚を機に安定した職場を求め、望み通りのホテルに就職できたというのに、三年目には絵里に何の相談もなく、寛は退職して

しまった。
「個展をやるんだよ。友達の画廊がオープンするから、その記念には是非作品出してくれて言われてるんだ。今のホテル

じゃ責任が重いし、仕事もきつい、絵を描いている暇がないんだよ。分かるだろ、休みだつて疲れちゃつて何にもできないんだ。オレは絵を描きたいんだよ。」

絵里には絵画は全く分らない。寛の描くものは全て風景画で、暗い色調のものが多く。以前にも友人と合同で個展を開いたことがあつて、知り合いがお義理程度に何枚か買ってくれたらしかつた。

「辞める前に相談して欲しかつたわ、今更こんなこと言つてもしょうがないけど」

「言つたら賛成してくれたのか？」

「賛成とか反対とかじゃなくて、あなたの言っていることは言い訳にしか聞こえないのよ。今のホテルにいたつて、お酒の量を減らせば絵を描く時間に回せるんじゃないの？」

「そんな力が残せるような職場じゃないよ、何度も言つてるだろ、絵筆なんて握れないんだよ。毎日、帰つてきてまた出ていくことだけで酒の力が必要なんだ」

「あまりにもお酒の量が多いわ。正体不明になるまで飲まないといられないなんて」

「だから、職場を代えるんだ」

「ホテルを代えたらお酒の量も減るし、絵も描けるのね」

「そのつもりだよ。俺は画家だからね。今のうちには金にならないからプロとは言えないけど、でも、趣味や遊びで描いているわけじゃない。自分としては絵が本業のつもりだから」

絵里がカウンセラーの勉強を始めたのは、寛との夫婦関係がうまく築けなくなつた頃からだつた。

砂漠の夢 12

佐藤健一との二回目の面接日だつた。一週間に一度の面接という取り決めは、実はとても重要なことだ。

絵里は一週間という間に、彼と交わした様々な会話を思い浮かべ、彼の表情を思い出し、自分の言動を思い返す。離れていても、健一は絵里のすぐそばにいて繋がっているのだ。

眠れない夜に、健一は死んだ妹から聞いたという、砂漠の夢のことを考えるという。彼がその夢に拘るのならば絵里もまたその夢にのめり込もう。

自分出来るのはそういうことなのだ、絵里は改めて自分に言い聞かせる。

先週と同じ時間に同じ電車に乗り、これから向かう相手、健一のために絵里は自分を整えはじめた。

絵里の中には、今、夫が大きく居座つていた。

「別れてもいいんだ」

昨夜、飲みながら寛がぼつんと呟いた。

「どうして俺と一緒にいる？ 親や兄貴への意地か。だからあれほど反対したのに、あんな奴と一緒にいるからと言われるのが悔しいのか。子供がいるわけじゃない。まだこの先は長い。変な意地張つて、自分の人生を無駄にすることはな

い

「意地で一緒にいるわけじゃないわ」

「じゃあなぜだ、……と聞いても応えが返ってくるわけじゃないし」「そんなに酔ってちゃ話なんて出来ないわ」

「何でもかんでも酒のせいか……」「そうや」

絵里は立ち上がった。充血して濁った目で酒臭い息を吐きながら、ろれつ回らない言葉を吐き出す夫のそばにはいたくなかった。寝室のドアを力まかせに閉めて、絵里は鍵をかけた。

職場を転々とする夫に金銭面で頼ることをやめ、子供を諦めた時点で、絵里は食品会社に就職した。定時に仕事が終わった、完全週休二日制の会社に入社できたのは、とても幸運だった。メンタルケア事務局の仕事は、会社が終わった後や休日に入れているのだ。

気がつくど、電車は目的地に近づいていた。

絵里はあわてて魔法の風呂敷を取り出した。そして、昨夜の夫とのやりとりをその中に掻き集める。

心の中いっぱい広がっている寛の言動、それに対する自分の思いを風呂敷に詰めこんで、きつく縛る。

絵里の中から寛が遠ざかっていく。寛に振り回される自分が消えていく。

空白になった部分に、健一が入ってくる。健一が大きくなっていく。

砂漠の夢 13

玄関のブザーを鳴らすと、ドアを開けてくれたのは、先週と同じ祖父の芳造だった。「今日は美知子さんが留守なもんね」

スリッパを揃えてくれた。

通されたのは初回面接の時と同じ応接間で、健一はもう先週と同じ位置に座っていた。

「どうですか、お元気でしたか」

向き合ってから、絵里は言う。

「まあまあです」

応える健一もいくらか慣れたようで、こちらに視線を合わせってくる。

「眠れましたか？」

「ええ、まあ」

「昨日は？」

「けっこつ眠れました」

初対面の時のような硬さはないけれど、何だか今日は取りつく島がない。前回、いい繋ぎ方が出来たと思つて安心していると、こつこつことがある。不用意な安心感が、相手の気持ちに寄り添えなくさせているのだ。あるいは健一自身、初対面の相手を前に喋り過ぎたと後悔しているのかもしれない。「では、昨日は夢のことを考えなかつたんですね」

絵里は少し踏みこんでみる。

絵里の所属するメンタルケア事務局員は、面接相手にアドバースしたり治療的なことをしたりということはない。専門知識を持つて相手の話を傾聴する方針なので、あまりこちらからは語りかけない。しかし、相手が話してくれないことには対話が成立たないので仕方ない。

「夢？」

「ええ、先週、佐藤さんは眠れない夜には妹さんから聞いた夢のことを考えていると」

「ああ、そういうこともありました」

健一は過去形で答えて、こちらを遮断する。今日はその話をしたくないということだ。そういう時はことらもすぐにそこで立ち止まる。

「もうすぐクリスマスですね」

さつき通つてきた、健一の父親が経営するコンビニエンスストアの前に、綺麗なツリーが飾られていたことを思い出して言う。

「そうですね」

健一はまたぼつんと答えるだけだ。

「クリスマスは嫌いなんですか？」

絵里が訊くと、しかし、健一はふいに顔を挙げた。

「分かりますか？」

砂漠の夢 14

取りつく島がなかった健一の態度に、変化が現れた。「いい年をして、好きとか嫌いとか、たかがクリスマスに対してね、どつして拘るのか……」 健一は足を組み、その上に指を組む。

「いろんなことを、うまく切り捨てていくことができない、だから自分はダメなんだろうと思います」

そして、口元だけで笑つ。

「どつして自分をダメだなんて思うのかしら」

「中山さんは、自分をそんなふうには思わない人でしょうね」

「そんなふうに見えます？」

「ええ、自信に満ちているように」

「そんな……、でもそれは、……反省します。そんなふうに見えているなんて」 絵里は自分の思い上がり指摘されたような気持ちになって、健一から目を逸らした。

相手の気持ちに添つてことを第一にしているはずが、どこかに、相手を何とかしてあげたいという気持ちが紛れ込んでいることがある。疲れた心を持っている人は、他人の心に敏感だ。いくら自分ではそのつもりがないと思つても、健一のような相手に言われれば、それはきつとその通りなのだろう。

「いえ、悪い意味じゃないんですよ」

そんな絵里を見て、健一は慌てたように付け加える。

「羨ましいです、そんなふうに分が自分でいられることに落ち着いていられる人が」

「落ち着いてませんよ、わたし」

「でも中山さんは、自分が自分であることに居心地悪いなんてことないでしょ」

「全然、居心地よくないです」

「そうなんですか？」

健一はまじまじと絵里を見る。

澄んだ瞳をしている美しい青年だ。

そう感じた瞬間、アルコールで充血した夫の目を思い出し、慌ててまた魔法の風呂敷を取り出す。そして、自分の問題をその中に包み込んで隅に寄せ、目の前の青年だけのを見つめる。

「むかし、大失恋して。それがちょうどクリスマスの時だったから、それ以来、クリスマスという「反射的に自分を守るような気持ちになってしまつて」

「大恋愛だったんですか」

「僕の中ではね、相手はどつだったか。おかしいですね、三十にもなつた男が、女々しいでしょ、喋つてて恥ずかしいです」

「年齢なんて関係ないです」

絵里は首を振る。

砂漠の夢 15

「女々しいつていう言葉に、オンナ、という字が使われているから、意気地なしとか未練がましいとかいう感情が女のものみたいなイメージあるけど、そんなこと絶対ないと思う」 健一は急に饒舌になつた。

「私もそう思います」

絵里は深く頷く。

「女より男の方が女々しいですよね」

「正直、そう思うことは多いかもしれない」

「よかつた、僕が特別かと思つてたから」

健一は笑つた。

その白い歯を見て、彼のこんな笑顔は初めてと思う。健康な歯を持つた青年だ。本当に若いのだ。

「中山さんは結婚されています？」

「ええ」

「恋愛結婚ですか？」

「はい」

「もう何年くらい？」

「……二十年です」「個人的なことを質問してはいけないですか？」

「そんなことないですよ」

「でも、何だか身構えるみたいで、中山さんの雰囲気は硬く

なります」

「この青年の前では決して嘘をついたり取り繕ったりはできないだろうと、改めて絵里は思う。勿論、どんなクライアンの下でも自己開示には躊躇わず、自分を偽らないようにしてはいるが。」

「佐藤さんにとつての私が、限定された存在でないほうがいいと思って。私に色々な枠がない方が話しやすいかなという気がしたものですから」

普通は「こまでは言わない。けれどもこの聡明な青年を前にすると、自然と言葉が出てしまう。」

「では、何でも聞いてもいいんですね」

「ええ」

「二十年も同じ相手と一緒にいるって、どういことですか」

「……むずかしいですね」「じゃあ、質問を変えます」

健一は足を組み替えた。

「人を好きになるって、どういことですか？」

言ってから、彼は自分の言葉に照れ笑いをした。

「おかしいですよ、中学生みたくで」

遠慮がちに、こちらの反応を窺っているふつだ。

「中学生の自分だって、今の自分の中にいるんだもの、全然

おかしくないですよ」

戸惑いながらも、絵里は応える。

砂漠の夢 16

「それじゃあ、もう一度お聞きします。人を好きになるってどういことでしょうか」 健一は長い前髪をかきあげて、絵里をまっすぐに見た。

「そうですね……正直、難しいです。どんなふうにも答えても、自分の気持ちと添わないような気がしてしまう、そういう種類の質問ですね。それより、佐藤さんがどうしてそういう問いを発してくるのかということの方が、私には興味ありますけれども」 相手にとつて重要と思われる問題には、即答すべきではない。あくまでも相手と一緒に考えていこうという姿勢を、絵里はいつも取っている。

「それは逃げですか、それともカウンセリングの手法ですか。僕は答えが欲しいんです」

しかしそれは、健一に通じなかった。

「私はいわゆる心理カウンセラーではありません。何度も言いますが、アドバイスをや治療的なことは出来ません。あくまでもお話を傾聴するだけです。ですから手法というものはないんです。姿勢、のようなものならば持っています。で、佐藤さんの質問ですが、異性に関しての感情と限定して、ですよ」

絵里は腹をくくる。

健一に試されているのだ、と思う。

「人を好きになることによって、相手に対してどこまでも優しくなれる自分があります。でも反対に、とても残酷になれる自分を意識することもあります。自分がどこまでも強くなれるような気がするし、とても脆くなつて崩れ落ちてしまつような、そんな気持ちにもなります。こんなふうに、いつも両極端の感情の中で揺れ動きます。誰かを好きになるととても楽しくて嬉しいし、すごく苦しくて辛いです」

言葉を選びながら、ゆっくりと絵里は話した。

「すごいな……僕は恋愛経験が少ないから、そんなふうに考える機会がなかつたっていうか……」「私も多くないです」

「質の問題ですか?」

絵里と健一は顔を見合わせて笑った。

健一の笑顔は綺麗だ。三十歳という年齢になる途中で抱え込んできている、傷つきやすく脆い魂が無防備に現れる。

「じゃあ今度は、佐藤さんに同じことお聞きしたいな。あなたにとって、人を好きになるといふのはどういふことですか?」

「僕には分からないです。分からないということが、今、中山さんの答えを聞いて分かりました」

健一は笑いながら首を振った

砂漠の夢 17

「わたしなんかを見ると、佐藤さんのように綺麗な男性を振

る女性って、いったいどんな人かと思ってしまつただけど」「綺麗などが、整つたとか、そういう顔は女性の場合いいのかもしれないけど、男性の場合は、例えば僕なんかは侮蔑的な言葉として受取ります。さっきも言つたけど、女々しいやつ、の代名詞みたいに相手は使っていると咄嗟に思つてしまふんですよね」

「ごめんなさい、そんなつもりは」

「いえ、中山さんに対してはそんなこと思わないです」

「よかつた」

「それに、恋愛の過程の中で顔形に拘るのは最初のうちだけでしょ」

「そつかもしれないですね」

「本当に大事なものは、その後にあるもので……」「その後?」

健一はそれには応えず、しばらく黙つて膝の上に置いた自分の掌を見ていた。

「妹も僕と似た顔だつたんです。妹は女だけど、自分の顔が嫌いだと言つてました」

顔を挙げ、彼は言った。

ふいに妹の話が出てきて、絵里はどきつとした。

健一は初回の面接で、死んだ妹がみたという砂漠の夢の話をした。しかし、二回目の今日、彼はそこに触れるのを避けているようだった。

彼に試されていると、絵里は感じていた。健一は絵里の前で自分をさらけ出してよいものが、こちらの反応を窺いながら迷っているのだらうと思つた。

「妹さんですか、どうしてでしょうね」

動揺が健一に伝わらないことを願つた。

「好き嫌いの問題でしょうね。整つた顔というのは、僕なんかマネキン人形を連想してしまふ。何を考へているのかさっぱり分からない。冷たくて気味が悪い。尖つた無機質な感じ。魅力的なんて全然思へないですよ」

「佐藤さんはお母さまと似てらっしゃいますよね、とても綺麗な方で」

「だから」

健一は絵里の言葉を遮つて、強い口調で言つた。

「だから、嫌いなんですよ、この顔が」

彼がこんなふうに強い否定の気持ちを現したのは、初めてだつた。

「僕は母の顔が嫌いです」

「妹さんもそんなふうに？」

「そう、似てるんです僕たち。顔も性格も双子みたいだね」

砂漠の夢 18

「中山さんに兄弟はいますか？」 健一が訊く。

「はい、兄が一人」

「二人だけの兄妹ですか？」

「そうです」

絵里は咄嗟に兄を思い出す。彼の冷たい視線や、夫と結婚する前に投げかけられた、侮蔑的な言葉の数々が蘇る。

自分にいやな思いを喚起させる話を聞く時は、無意識のうちには逃げようとして、相手の話を流してしまふものだ。そうならないように、あわてて自分の中にいる兄を隅に押しやる。「お兄さんと中山さんは似ていますか？」

「いいえ」

「じゃあ、僕たちみたいな兄妹ってへんだと思つてしょうね」

「そんなことないです、それぞれですから」

「そう言つと、健一は少し安心したようだつた。」

「妹が見た砂漠の夢の話、この前しましたよね、中山さんも拘つてくれると」

「はい、ずっと考えてました」

健一の妹が繰返し見ていたという砂漠の夢に、彼は拘つていた。砂漠のテントの中で寝ていた彼女が砂嵐に遭つて生理め寸前の時に、安全な場所に移されて何かに抱きとめられているという夢だつた。

「妹さんは理想を求めていたのでしょうかね。自分のあるべき姿を探していたのかしら」

ある人にとってそれは社会的地位、名譽、金であり、理想

的な結婚相手との幸せな結婚生活だったりする。それを得るために人は現実という枠の中で行動し、もがき、苦しむ。健一の妹の夢もそんな苦しみや葛藤の現れではないかと、絵里は思った。

「中山さんはずいぶん難しく考えているんですね」

絵里の言葉に、しかし、健一は笑った。

「どんな理想を持ってどんな自分を目指していくか。それはとても大きなことではあるけれど、でも、妹は、いえ、僕たち兄妹が望んでいたのは、そんなたいしたもんじゃない、とても単純なことだったんですよ」

健一はまたしばらく、自分の掌を見ていた。

「僕たちが欲しかったのは、ただ、安心して眠れる場所でした」

やがて顔を挙げ、彼は静かに言った。

「僕と妹は、安心して眠れる場所が欲しかったんです」

彼はそう繰返した。

その言葉が持つ重みに圧倒されて、絵里は言葉を失った。

そして、面接時間が終了した。

メグミの夢 1

健一の面接が終わると、絵里はいつもと反対方向の電車に

乗った。高校時代の友人、メグミと逢うためだった。おとこの夜、半年ぶりに彼女から電話があつた。半年ぶりくらいだったろうか。

「ねえねえ絵里、今週さあ、会社休めない？ ちょっと話したいことあって」

メグミはよく、ちよつと話したい時に絵里を思い出す。デートパート勤めの彼女は平日でないと休みが取れない。そのため、子供がいなくて自由のきく絵里が、いつも犠牲になっている。「今度はなんなの？」

「今度つて、あなた、あたしそんなに色々なトラブル持ち込んでるっけ？」

「やっぱりまたトラブルだね」

「ごめん、実はそうなのよ」

ふふふ、とメグミは他人事のように笑う。

「で、なに？」

「絵里、ねえ、もっと人を優しく包み込むような言い方はできない？ よくカウンセラーやってるよね」

「人格を入れ替えるからね、その時間だけ。で、用はない？」

「ったくもう……。あのね、うちのトメがさあ……」「誰だつて？」

「シユウトメよ。略してトメ。そのトメがさあ、最近どうも留守の間に、こっそりうちに上がり込んでるみたいなのよ」「

姑は一人暮らしで、メグミ一家とは同じ敷地の別棟に住んでいる。

「なんで分かるの」

「匂いがあるんだ」

「でましたね」

メグミは匂いにとても敏感なのだ。そのため、彼女の夫は隠し事ができないと嘆いている。

「なんかさあ、寝室とか匂つたのよね、トメの髪の毛の匂いがあるのよ。でさあ……」「分かった、分かった、休みとるから」

その先を語り始めたら、一時間では終わらない。絵里は話を遮った。

「ダンナが出張なのよ、明日から三日間。その間に来れるんだつたらうちに泊りにくれば？」

メグミの一人息子は東京の大学に行っている。

「来てほしいんですけど」

絵里が言つと、

「いつもスマンね」

彼女は電話の向こうで明るく笑った。

メグミの夢 2

メグミの家の玄関前に立つと、チャイムを鳴らす前にドアが開いた。「早かったじゃない」

メグミが顔を出した。

「待ってたみたいないタイミングね」

絵里は駅前で買ったケーキを手渡す。

「サンキュー、忙しいとこ悪いね。待ってたのよお、鍵穴から覗きながらさあ」

入って入つてと、メグミは絵里の背中を押す。

居間のテーブルの上には、ワインとメグミの手料理が何品も用意されていた。

「おお、これはまた、有給取ったかいがあったわ」

メグミは料理が趣味で、今でも月に二回ほどフランス料理の教室に通っている。

「お腹すいたでしょ」

「すーく」

「お仕事ごくるつ。さあ、お食べ」

ワインを飲んでいるメグミの傍らで、絵里はテーブル上の料理を黙々と平らげる。うずらのソテーとサーモンのサラダは特に好物なので、彼女は必ず用意しておいてくれる。

「よく食べるよね、ただひたすらに、幸せそうに」

グラスに二杯目のワインを注ぎながら、メグミが感心したように言つ。

「幸せだわ、いい友達もって」

「お互い、持ちつ持たれつだね」

「このホタテのカルパッチョ美味しいよね」

「ちっ、人の話を聞いているのかい？ どうぞ全部食べてね」

あなたの為に用意したんだから」

気がつくど、メグミはワインのボトルを半分空けていた。

「ねえペース、速くない？」

ようやく心地ついて、絵里が言っつ。

「最近さあ、酒量が上がったのよ」

「お姑さんのせい？」

「それも、ある」

「も、ですか」

「そうです。も、です」

「も、は怖いよね」

年を重ねるほど、悩みの範囲が増えてくる。夫のこと、舅姑や親族、子供のこと、あれもこれもと重なるつてくると、自分の健康まで危うくなつてくる。更年期障害の年齢にも差しかつているので、体の変調が続くと、心の健康も保てなくなつてくる。

メグミは以前、職場のトラブルから不眠になつて、睡眠薬を手放せなくなつたことがあつた。

メグミの夢 3

「さて、「馳走になつたお礼に聞いて上げるね、話してみよ」 絵里はグラスを取り上げて、メグミに言っつ。

「悪いね、カウンセリングしてきたばかりの人に、またおんなじことさせて」

ワインを注ぎながら、メグミは珍しく遠慮がちに言っつ。

「おんなじことなんて出来ないよ、いつも言つてるじゃない」

健一との面接と、普段の生活で友達の話しを聞くのとは全く違つ。面接では自分を整えるが、それは時間が限られてるからこそ出来ることだ。

「うん、それは分かつてるけど」

今日のメグミはいつもと少し違つ。

「どうした、いっぱいありすぎ？ 一つずつ言つてみて。一番強力なやつは何？ おシュウトメさんの匂いがどうのこうのつて」

「トメのことは結構どうでもよくなつてきた」

メグミはまた、自分のグラスにワインを注いで、溜息を吐く。

「翔のことなのよ」

東京の大学に通つている、メグミの一人息子だ。

「絵里には子供がいらないから、これまであんまり翔のことは話さなかつただけ」

「うん、わかつてる」

「あの子さあ、お勉強が得意な子じゃないから、高校がほら、あんまり評判のいいところじゃなかつたでしょ。で、友達がよくなってね……。それでも何とか大学入つて、まあ一安心してただけ。ところがこの前、電話がきてね、何とかロー」

ンとかつていうやばいところから。お金借りてるのよ、あの子」驚いてすぐに息子から事情を聞くと、大学の先輩に貸してくれと頼まれて、借りたお金だという。翔は一人息子ということもあって、少し気弱なところがあるということだった。

「頼まれたって、ほんとのこと？」

「それは本当だったの。緩慢なる脅してやつをされたのよ、その先輩っていう子に。その子とも連絡ついて話したの。夫の知り合いで間に入ってくれる人がいて、何月何日までに戻しますって書類を交わすことになってる」

「解決してるじゃない」

「だからさあ、……人生って数式なのかって」「答えが出ても、思いが残るってやつね」

「そういふこと」

メグミはまた溜息を吐く。

メグミの夢 4

「翔って夫によく似てるのよ。今度のことでね、本当はあの子がいやだって断ればいいわけでしょ、どんな事情があるうとも。その先輩ってやつは、翔の頼まれれば嫌と言えない性格を見越していたの」「昔からそうだった？」

「そつよ。優柔不断で気弱、夫にそっくりよ。だから翔に腹が立つんじゃないくて、夫に腹が立つのよね。あんたのそつい

うところ、息子が全部受け継いじゃったじゃないの、つてね。勿論、面と向かつて言葉にはしないよ、いくらなんでも、そこまでではね。だからさ、そうやって腹に溜めておくと、今度は自分にも腹が立つてくるのよ、こんな男と結婚したからだった」

絵里が羨ましいと、よくメグミは言う。絵里には子供がない、夫の寛は親も兄弟もない天涯孤独の人。引きずっているものがなくていいと。

「眠れなくなるの？」

「そつよ、だから酒量が増えるってっけ」

メグミは以前も不眠に悩んで薬に頼り、脱け出すのに苦労していた。

「翔ね、大学も留年するのよ、単位不足で、学校に行つてないみたい」

「あたしも行かなかった」

「でも、四年間で卒業したでしょ」

「まあね」

「つたく、霸気がなくて融通がきかないの、夫にそっくりなのよ。もつと優秀な人と結婚すればよかったわ」

「ダンナさんって、頭よさそうに見えるけど」

「そこそこの大学出て、それが何よ。自慢してるのはトメだけよ。息子は国立大学出ですから、みたいなことよく言うつよ」

「自慢の息子ってわけだ」

「バカよ、トメと夫は。親子揃っておめでたいの。最近さあ、夫のメガネ外した顔が、トメにそっくりになってきてぞっとしてるの」

「とめどなく、ずるずると出てくるわね」

「えり〜、あなたにだから言えるのよお、そりゃああたしなんか短大卒で全然あたま良くないしい、いい妻してないしいい母でもないしい、ましてやいい嫁でなんてありえないし」

と、メグミは自分のグラスにワインを注ぐ。

「分かつてるのよお、翔がお勉強できないのはあたしに似たからよう、でも、あの情けない性格は父親似なのよお、お勉強より重要なことでしょう、生きていく上ではさあ、こんな気持ちなんてさあ、絵里にしか話せないんだってばー、分かつてよー」

そしてボトル一本が空になった。

メグミの夢 5

「絵里が羨ましいよ」メグミは言う。

これが酔った時の彼女の口癖だ。もつ酒は切り上げた方がいい。これ以上飲むと、泣き上戸の彼女はとめどなく泣き出すことになる。

「さあ、もつこれでオシマイ」

絵里は新しいワインボトルをテーブルの下に隠す。

「あんたはさあ、ダンナの親も兄弟もないし、子供もない。定年まで腰を落ち着けていられそうな会社の正社員だし、カウンセラーにもなれて好きなことしてる」

「人のことはよく見えるんだね」

「あたしの周りで、自己実現ってやつをしているのは絵里だけね。ポイント高いんだよ」

「メグミのポイントねえ……」「冗談で言ってるわけじゃないんだよ」

「分かつてる、でも、それぞれあるんだよ、色んなことが。カウンセラーっていつても、たいしたことしてるわけじゃない。臨床心理士じゃないから、アドバイスや治療的なことしてるわけじゃないし」

「それは知ってるけど」

「メグミはどういう自分になりたいの？」

先ほどまでの健一との面接が思い出されて、絵里は訊いてみる。

「こんなふうにグチらない自分さ、絵里を呼び出して飲んだくれて、こんなこと言わない自分さ」

「それは、難しい」

「ねっ、そうでしょ」

「ははは、とメグミは笑つ」

「それがなくなったら、メグミじゃなくなる」

「カナシいなあ、絵里の中じゃあたしのポイント相当低いつてことだよね」

「ここにもまた自己採点の低い人間がいると、絵里はまた健一を思う。恵まれた容姿と優秀な頭脳を持ちながら、自分の中に閉じこもっている青年を。」

「低いとか高いとかじゃないよ、あたしはメグミが好きだから」

絵里が言つて、

「ありがとう、絵里だけだよお、そう言ってくれるのはあ」
メグミは泣き出した。

遅かった。彼女の泣き上戸が出てきてしまった。絵里の訪問を待ちながら、きつと先にビールか何かを飲んでいたのでろつ。

「あたしも、絵里が好きだ」

テーブルに突つ伏して、本格的に泣き出した。

メグミの夢 6

「メグミの料理は最高。家族は幸せだね、いつも美味しいもの食べられて」 絵里は手を伸ばし、泣いているメグミの肩に触れる。

「こんなのは誰にもできるよ、やる気さえあれば」

顔を上げてそれだけ言つと、またメグミはテーブルに突つ伏して肩を震わす。

「私には出来ないよ」

絵里は言つ。

やる気があるかないか、実際にやるかやらないかで、人は分かれていく。気のある人、やれる人には、それが理解できないらしい。

「メグミが作ってくれる、朝の焼きたてのパンが好きだよ。だから泊りにくるの」

「有給とつて？」

突つ伏したままの泣き声で、メグミが言つ。

「そつだよ」

絵里は笑つて応える。

「でも、うちじゃあもう誰も、あたしが作ったパンなんて食べないんだよ。買った食パンとかアンパンの方が口に合つんだつて」

「ダンナさんと翔くんでしょ、男なんて味が分からないだつて。メグミのフランスパンなんて最高だよ、皮がぱりぱり、中はしつとり」

「でも、トメだつて食べない。ありがとう、なんていかにも嬉しそつに受取るくせして、しつかりカビはやしてた。ゴミ袋に捨ててたの見ちゃったんだ」

「シユウトメさんはお年だからね、分からないよ」

「だよね」

急に気を取り直したように顔を上げ、涙を拭きながらメグ

ミは言う。何のことはない、子供そのままだ。

「メグミってさ、プロでもやっていけそうじゃない？ 本格的なものじゃなくても、フランスの家庭料理の店とかあるじゃない」

「うん、あたしも考えたことある」

「そういうの、前からメグミに向けてそうだなあって思ってたのよ」

今メグミは、パートでデパートの婦人服売り場にいる。社会的だから接客業には向いているが、料理の腕を家庭の中間に留めておくのはもったいないと、前から絵里は思っていた。

「でも、無理だよ、料理なんてそんなに甘くない」

ふいに現実に戻ったように、メグミは言う。

「まあね、何でもタイヘンだけど」

「あたしはただ絵里みたいに、そんなふうに着て暮らせばいいんだよ」

メグミの眼からまた涙が噴き出してきた。

メグミの夢 7

「絵里、ごめんね」 眠っているものとはかり思っていたメグミが、隣の布団の中から言った。

「起きてたの？」

絵里が顔を向けると、

「酔い醒めちゃったよ」

「こちらに寝返りを打った」

「また飲みなおす？」

「もういい」

メグミはふっと笑い、

「いつも一方的な話しばつかでごめんね」

「いいよ、こっちがどっと思ってるかなんて気にしなくても」

「うん」

「この年になるとあちこちで、相手がこの言葉をどっ受け止めるか、みたいな神経の使い方しなくちゃいけないって、すぐ疲れるじゃない。せめてここだけでは、そういうことを抜きにしよう」

「だよな」

「もうさ、疲れることしたくないよね」

「そうそう」

そう言ってもらえると嬉しいよ、とメグミは枕元のスタンドの豆電球を点ける。

「おシェウトメさんのことはいいの？」

「トメは放っておく」

「それがいいよ」

「すぐそこに住んでるけど同居しているわけじゃないし、気の持ち方で何とかなるかも」といつか、していくしかないな

一緒に暮らしていくのなら、結局はそうするしかないのだ。それはみな、分かっている。

「トメはさ、養女だったんだって。小さい頃から人の顔色みて育った人らしいよ。だから人の前では完璧な人間を演じたがつてね。歪みも出てくるよね」

「で、留守の間に合鍵使つて内緒で入り込むつてわけか、たままないね」

「だよねえ。でもそれについちゃあ、ちと考えたさ。名案ありだよ。トメがこつそり来て見そうなところに、一筆書いておく」

「なんと?」

「覗くな! 親子の中にも礼儀あり」

冷蔵庫の中に貼つておくという。

「見たら心臓とまるよね」

「そうそう、それが目的さ、なんちゃって」

メグミは笑った。

メグミの夢 8

「高校時代もこうやって、よく朝まで話したよね」 スタンドの薄明かりがメグミの目の下に影を作つて、彼女をやつれて見せている。

「深刻に、熱くね。何をあんなに語り合つてたんだろつ」

「あたし達、一度絶交したこともあつたよ」

「ああ、あれは私からだつたわ」

絵里は潔癖だった自分の若い頃を思い出す。潔癖さを他人に対してだけ求めていたのだから笑つてしまう。

「どんな理由があつたのか、ねえ絵里さんよ」

メグミもくすつと笑っている。

「さつきさ、あんた泣きながら言つてたこと、覚えてる?」

絵里が訊く。

「ぜんぜん」

「あたしは絵里みたいに、そんなふうに着いて暮らせればいいんだよ、うおーん、つて」

メグミの泣き真似を試みる。

「酔つてもまともなこと言つてるじゃん、あたしつて。た

いしたもんだわ」

メグミは感心している。

「落ち着いてなんていないよ、みつともないとこなんて、メ

グミにいつぱい見せてるでしょ」

「なんか絵里つて、余裕あるみたいに思わせちゃうよつな

何かがあるつてことじゃねえですかね」

「ですかねえ」

「あたしなんか、いつも誰かに頼らないとダメで。例えばこうやって絵里を呼んでさ、慰めてもらつてなんて、自分つて

だらしがないあとと思つ」

「私だつてメグミを頼つてるよ。それに誰かを呼ぶ力がある

って、それはすごいことだよ。誰にも来てもらえない人が、世の中にいっぱいいるんだから」

「で、絵里のようなカウンセラーが繁盛するわけか」

絵里はあいまいに笑う。そして、二回目の面接を終えたばかりの健一を思う。彼の孤独を思う。

「メグミは、どんな自分になりたいの？」

「そんな難しいこと考えたこともないよ。……ただ、今の自分じゃイヤだっと思ってただけ」「全然むずかしくないじゃん、それだって立派な答えだよ。どんな自分になりたいですか？ 今じゃない自分です、って、どう？」

「確かに」

応えて、メグミは長い欠伸をした。

「さ、もう寝よつ。朝食の用意ができたら起こしてよ」

絵里の言葉に、はいはいと応えながら、メグミはスタンドの明かりを消した。

メグミの夢 9

鼻をくすぐられて目を開けると、メグミが枕元に座って絵里を覗き込んでいた。「なによお」

布団を被って寝返りを打つと、

「これだよーん」

メグミは布団を捲って、絵里の鼻先をくすぐったものを目の前に差し出した。

「ラベンダー。このリラックス効果で、夢の続きのようない目覚めをあなたに。…さあ、起きる起きる」ドライフラワーにしたラベンダーを振りまわすメグミのエプロンの袖から、コーヒーマットの匂いが漂ってきた。

「普通のものしかないよ」

メグミは言うが、居間のテーブルには彼女が焼いたフランスパンのガリックトーストにブレインオムレツ、自家製ソーセージ、グリーンサラダの上に、メグミがチーズを削ってたっぷり落とす。

「ここくると、二三口は太るね」

「だって絵里、二人分食べていくんだもの」

メグミはコーヒーマットを飲みながら、絵里が食べるころをにこにこ眺めている。

「食べないの？」

絵里が訊くと、

「あんた見てるだけでお腹いっぱい。食べてる絵里が一番幸せそうに輝いてるって、これどうよ」

メグミは笑いながら、自分の分のオムレツも絵里に差し出した。

「絵里さあ、前から思ってたんだけど」

食後のエスプレッソを飲んでいる時、メグミが遠慮がちに口を開いた。

「もしかしてあんた、ダンナとつまくいてない？」

「なんで？」

絵里はどきつとして、カップを置いた。

「何となくだよ」

「……あんまり話したくない」 絵里は出窓の花瓶に投げ入れてある、リラックス効果があるというラベンダーを一本引き抜き、匂いを嗅ぐ。

「気に触ったらごめんね」

メグミはすまさそうに言う。

「誤解しないで。言葉にするのが鬱陶しいんだ、それに今はあまり考えることもしたくない、それだけ。時期がきたら話すよ」

「絵里、ほんとごめん。気にしないで、忘れて」

彼女は絵里のカップにお代わりを注ぐ。

「分かるでしょ、メグミ。私も弱いつてことさ」

カップを取り上げ、絵里は言った。

メグミの夢 10

昼過ぎにメグミの家から戻ってくると、今日は遅番の寛が、キッチンで新聞を読んでいた。「おかえり」

珍しく寛から声を掛けてきた。

「楽しかった？」

「うん、ダンナさんによろしくって」

絵里はたわいもない嘘をつく。

「それはよかったね」

寛は新聞を畳んだ。話したいふうなので、仕方なく向かいに腰掛ける。

「今カウンセリングしている相手も、また年寄りかい？」

彼は煙草に火をつける。

「うつん、若い」

絵里は首を横に振る。

「女？」

「青年」

「ひきこもりか？」

「そうでもない」

酒が一定量を超えると寡黙になるが、寛はもともとが饒舌な男だ。

昔は彼の話聞くのが好きだった。本もよく読んでいたから、話題が豊富だった。絵里がカウンセリングに興味を持ち始めたのも、そんな雑談の中で彼から聞いた心理学の話がきっかけになっていた。

「今日の新聞に載ってたんだけど、これ、参考になるかもしれないよ」

寛は畳んだばかりの新聞を広げて、新刊図書の欄を示す。

臨床心理学か。

「今日は何時に家出るの？」

寛の手元を覗き込みながら、絵里は訊く。

彼が今勤めているビジネスホテルは、早番遅番の時間帯は一応決まってはいるが、規模が小さいので、変則的なだ。「それなんだけど、ちょっと話があつて待ってたんだけ、コーヒ―飲む?」

やっぱり、と絵里は思う。あるいは、またか、という無力感だ。寛がしらぶで饒舌な時は、こちらに負い目のようなものを抱いている時だ。きつとまた、ホテルを辞めてきたのだろう。もう話す先から分かつている。聞きたくはない。

「ちよつと頭痛くて休みたいんだけど」
寝室に入ろうとすると、

「少しかだけ話せないか」
寛の声が追ってきた。

絵里は無視して戸を閉めた。

メグミの夢 11

両親が離婚して以来、寛は母親と二人だけで暮らしていたが、その母も彼が高校生の時には亡くなっている。そんな環境の中にいたからだろうか、彼は安住ということを知らない人間だった。居場所を転々と変えながら、気に入った場所でホテル勤めを繰返す生活をしている中で、絵里と知り合つたのだった。

そんな寛が結婚を機に、定職を持って落ち着いてくれると約束してくれた。しかしその約束も、三年後には破られてい

た。以来、彼はいつたい何度転職を繰返してきたことか。「あたしだったら、絶対に離婚だよ」

以前、メグミに夫の愚痴をこぼした時、彼女はそう断言した。

「だいたいさあ、結婚の目的って何?」

「もくてき?」

「そう、目的。あんたまさか、あたしはただ好きで一緒になつただけだからとか、言っんじゃないでしょうね」

「その、まさか、かも」

「で、今になって、しまった、と?」

「かも」

「つたくもつ。……あたし最近しみじみ思つけど、結婚のメリットって、生活の安定及びその保障だね」「メグミの物差しで計ると、あたくしたち、絶望的ってことですね」

「ということだ」

「でも、それは言ってるかも」

「やばいじゃん、別れるしかない、という結論がすぐに導かれてしましますが……」「人の心って数式じゃないんだよーつて、メグミさん、酔っ払って言いながら泣いてたことなかつたっけ?」

「でしたね、それもまた、あたしの中にある物差しつてやつで」

そんなやりとりが思い出される。

心が理屈通りに動いてくれたら、どんなにかラクだろう。寛との二十年の結婚生活を振り返ると、三年で破綻していてもおかしくなかったのだ。最初の数年は、結婚に反対した家族に対する、意地のよくなものがあつたのは確かだ。しかし、その先にあつたものは何だつたのだろうか、改めて絵里は思う。

結婚時の約束を三年で破つた寛は、職場で知り合つたと思われる女性とも交際があつたようで、絵里を裏切っている。メグミに言わせると、サイアク、だった。

メグミの夢 12

あれは四、五年ほど前になるだろうか。時おり無言電話が掛かつてくることがあつた。しばらく続いているうちに分かつた事だったが、それは寛のいない時間に限られていた。ホテル勤めの彼が家にいる時間は変則的だというのに。

「あなたがいない時はかり、狙つてみたいにして掛かつてくるのよ。」

絵里が言つと、

「へえ」

と、無関心を装つ寛の態度がどことなく不自然に見えて、絵里は直感的に女ではないかと思つた。それで、次に無言電話がきた時に、言つてみた。

「あなた、夫と同じホテルの方ですか？」

とたんに電話が切れた。

無言電話はそれで終わった。

しかし、これには続きがある。

「どうしてお分かりになったの？」

やはり寛の留守中に掛かつてきた電話が、挨拶抜きでこう語り掛けてきたのだつた。

「失礼ですが、どちらにお掛けですか」

間違い電話と思つて問いかけると、

「なかやまさん、のところです。なかやまひろしさんの奥さんの、なかやまえりさん、にです。」

挑戦的な女性の声に、それまでの無言電話の主と直感した。

「わたくしのこと、寛さんにお聞きになった？」

アルトの、少し鼻にかかつた声だ。声の感じは悪くない。

でも、悪くないのはそれだけだ。

「失礼ですが、あなたは私の名前を知っています、私は知らないんです。まず、名乗っていただけますか？」

言いながら、自分の声は相手にどんなふう聞こえているのだからと、絵里は気になった。

「カワムラです、さんずいの河に流れる子と書いて、河村流子です」

「その河村流子さんのことは、夫から聞いた覚えはありませんが」

「変ですなえ、奥さんにはもうお話になっていただけなのか」

と」

「うち、保険なら間に合ってますけど」

この電話の主が保険のセールスレディーだったらしいのにと、頭の隅でちらっと思つと、それが言葉になつて出た。不意をつかれたように、相手は沈黙した。

「もしもし」

絵里が呼びかけると、相手は黙つて電話を切つた。

けつこついい切り返しが出来たと思つ反面、絵里は自分のつまらない虚栄心を感じていた。

メグミの夢 13

その日、帰宅した寛に絵里は言った。「河村さんって人から電話あつたよ」

「カワムラ？」

寛は絵里から不自然に目を逸らした。

「カワムラ・リュウコとか言つてかな……。寛さんから聞いてらつしやると思つた、なんて。保険の人みたいだから、一応断つといたけど」「ああ、それでいいよ。前におんなじホテルで働いてたんだ。今は保険会社にいるみたいだから」

寛の声は、半オクターブ高くなつていた。

なんて嘘が下手な人だろう。そう思つた時、彼は河村流子と別れるだろうと絵里は確信した。なぜか、それは確信だった。

事実、彼女からの電話はそれきりだった。無言電話も、もう掛かつてこなかった。

その話をする、メグミはとても憤慨した。

「サイアクだね、即離婚だよ、あたしだったら」

「どうしてすぐそこへいっちゃうの？ 人はどういつ時に離婚つて決意できるのかしらね」

それは絵里の正直な気持ちだった。

無言電話の主が寛と関係のある女性かもしれないと思つた時と、実際に彼女から電話が入つた時には、それなりに動揺した。しかしまた一方では、動揺する自分を意外そうに見ている自分もいたのだつた。心が乱れるのは妻としてのプライドなのだろうか、などと考える妙に覚めた自分が、彼に対する愛情や憎しみ、嫉妬などの生々しい感情を遠ざけていた。「あんた、それで終わりにするの？ ダンナに追求しないの？ ほんとのこと知りたくないの？」

「だつて、聞かなくなつて分かるよ。動揺してるのよ、まずいことになつたと思つてる、ただの遊びだよ」

「ほんつと、おめでたいわねえ」メグミはつくづくと絵里を見て、溜息をついた。「そんな確信が、いったいどこから出てくるわけ？」

「あたしも不思議、どこからだろうね」

メグミに応えながら、絵里は自分がどうして寛と一緒にいるのか、その時にはつきりと分かつた。

寛という存在は、自分に安心感を与えてくれるのだ。決して私から離れない、私を見捨てないと、どうしてか思い込ませてくれる。それが、どこから来るのかは分からないのだけだ。

無条件で、ありのままの自分を受け入れてくれるのは、そう感じさせてくれるのは、この世の中で寛ただ一人だった。これこそが彼と別れない理由だと、その時絵里は信じていた。

メグミの夢 14

寛が自分から離れないなんて、そんな確信はいつたいどこから来ていたのだろう。それは絵里の身勝手な思い上がりにも過ぎなかった。メグミの家から帰毛し、話があると言つ寛を無視して寝室で少し眠り、夕方近くに目覚めると、彼はいなくなっていた。食堂のテーブルの上に、手紙が置いてあった。

「しばらく家を出ます。心配しないで下さい」

メモ用紙に書かれたその短い文章を、絵里は何度も読み返した。

間違はなく、寛の文字だ。筆圧の強い丸っこい文字。眺めていると、不安が襲ってきた。まさかとは思つが、中高年の自殺者は増えているのだ。

じっとしていられなくなつて、さつき別れてきたばかりの

メグミに電話を掛けた。

「だからさあ、心配いらないんじゃないの？ 子供じゃないんだし、本人そう書いてるんだし」

メグミは半ば腹立たしそうに、半ば投げやりに言っている。

「こんなこと初めてなのよ」

「だって若い頃は、いつも放浪生活してた人なんですよ」

「まだ二十代の、若い頃の話よ」

「四十過ぎくらいになると、また戻っていくんじゃないの、本来の自分つてやつに。うちのダンナ見てもそう思うもん」

「どんなふうによ」

「いったじゃん、メガネ外すとトメにそっくりだって。若い頃は全然違つ顔してたのにね。本来持つて生まれたものが出てくる時期なのよ」

「親子だもの、似てて不思議じゃないでしょ、それにちよつと問題が違つような気がするけど」

おんなじよお、とメグミ。

「若い頃はエネルギーあるから振り払えるのよ、育ってきた過程で身についたやつたいやなもの。でも年と共にエネルギーが低下するから、また戻ってくるの、ターンしてくつていくる」

「だから、それと顔つきがどう繋がるのよ」

「緊張感がなくなるから、トメと同じ顔になつてくんのよ」

だらーっとしちゃってさ」

「この手の話は際限がなくなるので、途中で遮る。」

「ねえ、今から出て来れない？」

不安感が押し寄せてきて、一人でいるのが辛い。

「悪いけど、ちょっとこれからトメの頼みで親戚まで行つてくるの、ごめんね」

そして電話は切れた。

メグミの夢 15

受話器を置くと、すぐにまた電話が鳴った。メグミが何か言い忘れたのかと思ひ、「どつしたの？」

挨拶抜きで応えると、

「中山さんですか、おひさしぶりです」

相手はメグミではなかった。どこかで聞き覚えのある声だった。

「覚えてらっしゃいます？」

そう言われて思ひ出した。少し鼻にかかった、感じのいいアルト。

数年前の夫の浮気相手だ。何度か無言電話をよこした後こんなふう我突然、声を聞かせてくれた。

「保険の方でしたよね」

その時と同じように切り返したが、今日は語尾が震えていた。電話の向こうで、声の主がふっと笑ったような気がした。

「ご主人、寛さん、ご在宅でしょうか」

感じのいいのは声だけだと、また思う。語尾が強気だ。彼女は、夫の不在を知っていると直感する。

「ええ、ここで飲んだくれて引っくり返っています、起きましょうか」

応えてから、彼女の名前を思ひ出す。カワムラ・リュウコ、

河村流子だ。

「お願いします」

声には、挑発が含まれている。

絵里は子機を持ったまま寝室に入り、夫のベッドを何回か蹴りあげる。

「困りましたね、何度も蹴ってるんですが、酔いつぶれていて起きないんです、どつしましうが」

「面白い方ですね」

笑いを含んだ声で流子は言った。それまでの挑発的な調子が消えている。

「私がですか？」

「ええ、そう……、ごめんなさい、悪い意味ではないんです、流子の口調が柔らかくなった。「すみません、笑ったりして」「夫はいないんですよ、ご存知でしょ」

「はい、知っています」

「あなたと一緒になんですか？」

「いいえ……」「夫の居場所をご存知ですか？」

「そのことでお話ししたいことがあります。出来ればこれからお会いしたいのですが」

「どちらで？」

彼女が指定したのは、駅前に新しく出来たホテルのロビーだった。

メグミの夢 16

そのホテルが出来たばかりの頃、クラス会で一度だけ行ったことがある。ロビーは広くて人が多いので、初対面の人との待ち合わせに適しているとは思えない。「私は三十歳です。髪は長いです。黒いセーターに黒いスカート、黒いブーツです」

流子は言った。

三十歳といえは、絵里が面接してる健一と同じ年だ。ずいぶん若い。前に電話をしてきた時は二十代の半ばだったというところが。その時から夫との関係がずっと続いてきたのだから。

「私は四十三歳です。同じく髪は長いです。着ていく服は……」

「……」

流子は言った。

「わたし、奥さんは存じますから、大丈夫です」

その声が笑いを含んでいる。

「お会いしたこと、あります？」

「いいえ」

やはり、少し笑っている。しかし悪い感じではない。

それでは六時にと、電話を切った。

取り敢えず夫は無事だろう。よかったと思つた。

待ち合わせまで、まだ時間の余裕があった。風呂に入ろう。確かまだラベンダーオイルが残っていたはずだった。ラベンダー風呂に入りた。メグミの家でドライフラワーを見た時から、そう思っていた。

洗面所の棚の奥から潰れかかった箱を引き出し、オイルを取り出して見ると、まだ三分の一も残っていた。

「ラベンダーの心に対する働き」リラックス効果があり、中枢神経のバランスをとります。ラベンダーの身体に対する働き「心臓を鎮静させ、心拍数を下げます。不眠症、頭痛などにも有用です」

説明書を声に出して読み上げる。

絵里は考えることをやめたかった。自分の周りに起こる出来事、それへの思い、他人の思惑、反応など、全て遮断したかった。

狭い風呂に湯を満たし、ラベンダーオイルを数滴落とす。

柔らかな香りが、湯気と一緒に立ち上ってきた。

湯の中で、絵里はゆったりと身体を伸ばす。

目を閉じると、とろつとした感覚に包まれる。そんな中で、

昨夜のメグミとのやりとりを反芻している。

(メグミは、どんな自分になりたいの?)

(……ただ、今の自分じゃイヤだって思ってるだけ) 私は

どんな私になりたいのだろう。

絵里は目を閉じたまま、風呂の中に沈んでいく。顎を埋め、口を鼻を、全身を湯の中に沈める。そして、身体の力を抜いていく。

流子の夢 1

約束時間の五分前にホテルのロビーへ入った。中央の噴水横には、大きなクリスマスツリーが色とりどりの電飾で輝いている。その下に人待ち顔の若い女性がいる。ロビーに点在するソファは客で埋まり、ひっきりなしに人が行き来している。

黒い服を着た髪の長い女性は何人かいた。相手はこちらを知っているというので、取り敢えず空いているソファを見つけて腰を下ろした。

寛が置手紙をして家を出たことが分かってから、まだ二時間しか経っていないというのに、途方もなく長い時を過ごしたような気がする。かと思えば、何だか芝居のワンシーンのように、他人事のようにだったりする。目の前の華やかなロビーの光景も、妙に現実感がない。ましてや、家出した夫と関

係のあるらしい女性と、こんな場所で待ち合わせしている自分も、自分でないような気がする。

(私はどんな自分になりたいのだろう)

どうしてか、そんな問いばかりが自分の中で繰返されるのだ。

「はじめまして、河村です」

顔を挙げると、目の前に黒いコートを持った黒くくめの女性立っていた。

「中山です」

絵里はあわてて立ち上がって頭を下げた。

河村流子は、小柄で目が細く、古風な顔立ちをしていた。

電話から受ける耳障りのいいアルトから、現代的で華やかな女性を想像していたが、どちらかといえば地味に見える。

「もつと美人かと思いましたでしょうか」

そんな絵里の心を見透かしたように言って、流子は笑った。

「よく言われるんです。ホテルで受け付けしているんですけど、電話予約入れられた方が実際にわたしを見て、あんたかあ、なんてがっかりした顔なさったり」

「そんな……」「いえ、もつ慣れましたから」

不思議な雰囲気を持った女性だった。

三十歳という若さなのに、ホテルウーマンという職業柄からだろうが、ずっと年上の自分よりも大人のような落ち着いた着きがある。姿勢がよく、歩き方もきれいで颯爽としている。柔

らかな声で語尾をはっきりと発音し、丁寧な日本語を使つきちんとした家庭に育ったお嬢さんなのだろう。

流子と並んで、ロビー横の喫茶室へと歩きながら、寛はこつう女性が好きなのかと、絵里は何となく納得していた。

流子の夢 2

喫茶室に入り、絵里と流子は窓際の席に向かい合って座った。ガラス戸の向こうでもまた、クリスマスツリーが華やかに輝いている。巨大なもみの木に点滅する電飾を見ていると、現実がまた遠のいていく。

あれは結婚した翌年だったか。イブの夜に、寛と都心のホテルへ泊ったことがあった。レストランの中庭には、大きなツリーが光っていた。それが嬉しくて、向かい合ってディナーを食べながら、不思議なほど二人はしゃいでいた。そんな過去もあったのだ。

（あたしは絵里みたいに、そんなふうに落ち着いて暮らせればいいんだよ）

ふいに、メグミの言葉を思い出す。

そうじゃない、ただ遮断しているだけだ。現実がこの中に入り込まないように、現実には侵されないように、自分を守っているだけだと、改めて絵里は思う。

もう戻らなければ、いつまでも逃げてはいられない。

絵里は静かに深呼吸をした。

「夫の、寛のことでお話があるとか……」 絵里は窓の外から目の前にいる流子へと、視線を

移す。そして彼女を見つめる。

緊張したように背筋を正して、流子は頷いた。

「昨日、寛さんから電話がありました」

彼女は膝の上に視線を落とした。

「寛さんとは、色々とお話しました」

「そうですか」

「一つ、先にお話させてください」と、流子は一呼吸置いた。

「わたし達は、わたしと寛さんは、奥さまが考えていらつしやるような間柄ではありません。わたしが以前、失礼な電話をしていたので、そう思われるのは無理ないのですが……」

「男と女の関係ではないと？」

「その通りです」

寛と流子は、二年ほど同じホテルで働いていた。彼女は今でも、そのホテルに勤務しているという。

「わたしはずっと、わたしの話を聞いてくれる人が必要としていました。でも、そんな人はどこにもいませんでした。一人もいませんでした。それがどういふことが、分かっていただけですか？」

流子は顔を挙げ、絵里を見た。

「寛さんとは、年齢はずいぶん離れているのですが、一人っ子同士でもあったし、寂しさを知っている者同士でもあった

し、そんなところから通し合うものがあつたと、……わたしの方はそう思っているのです」膝の上の手を開いて、彼女は両手の指紋を確かめるようにひとしきり眺めていた。

流子の夢 3

流子の目を正面から見て、絵里は胸をつかれた。そこには、これまで彼女が面接で見てきた多くの人たちと、共通の光があつた。聡明そうな輝きの奥に、深い孤独が沈んでいる。自分はいつも手繰り寄せられるようにこういう目をした人の前にいると、絵里は思う。

「寛さんという人と出会えて、本当によかつた。これまで生きて、見て、感じてきたことを、そのまま話せる人と出会えてよかつた。そのおかげで、わたしはわたしを知ることができました」

それから流子は心持ち首を傾げ、しばらく考えているふうだつたが、

「寛さんは、他人に対して否定や拒絶をすることがありません。何を言つても全て受けとめてくれる、そういう人ですよ。違いますか?」

その問いかけを曖昧な笑いで流しながら、寛の本質をついていると絵里は思っていた。

ウエイトレスがコーヒーを置いていった。

流子は袋の端を親指と人差し指で千切り、砂糖をカップの

中に少し落としした。スプーンでゆっくりとかき混ぜて、カップの縁からミルクを少しずつ流し入れる。一連の動作がとても女性らしくて綺麗だ。白くてきめの細かい肌をした小さな手、手入れのいい丸い爪は透明なマニキュアで光っている。「お茶をやつてらっしゃる?」

以前 茶道の教師をしていたという老女を面接したことがあつた。彼女もやはり、手先の動作が見惚れるほど綺麗なだつた。

「ええ、母が教えているものだから、自然に」

「やつぱり。指の遣い方がとても綺麗だから」

「そんなこと……、言われたの初めてです」流子ははにかんで、指を隠すよう重ねて膝の上に置いた。

「母は茶道の教師で、美人なんです。いつもおお弟子さん達に囲まれて華やかな人で、小さい頃はそんな母が自慢でした。綺麗な着物を着て、先生、先生って呼ばれる母が」

「そんなに素敵なお母さんが」

「わたしはすごく母が好きだつたんですが、でも、母はわたしに失望してたんなんです」

「失望を?」

「わたしは父に似て、こんなふうには……何というか、欠点の多い顔です」「私にはとても日本的で上品に見えますが」

顔形というものは、人をいつも悩ませる。その人の持つ、ほんの一部に過ぎないのだけれど。

～ 流子の夢 4 ～ 「母は妊娠した時に、女の子を望

んだそうです。夢を持っていたんです。もし女の子だったら髪を長くカールさせて可愛い洋服を着せ、お揃いの服を着て一緒に歩きたいと。でも、わたしが生まれたその日のうちに、わたしの顔を見てそれを諦めたと言います。赤ちゃんは父そっくりだったから。……わたしは誕生したその日に、母の夢を壊してしまった。それからずっと、裏切り続けています。

お茶も続けられずに止めてしまいましたし、いまだに結婚もせず、こうして、目を伏せて静かにカップを口に運ぶ彼女から、その孤独が見える。

「お母さんを、とても好きなんです」

それには応えず、流子はしばらく膝の上に置いた自分の手を眺めていた。

「唯一、似たのがこの手かもしれないですね、言われて見れば、この手だけが、わたしと母の共通点なんです」

絵里はこれまで幾度となく、面接を通して、あるいは私的な会話から、こういう話を聞いてきた。誰かに自分の人生を支配され、捻じ曲げられ、損なわれ続ける物語だ。そして本人はそのことに気づかない。あるいは気づいても、そこから脱け出せない。

目の前にいるこの魅力的な女性は、絵里が百万回もその魅力を力説したところで、信じよつとしないだろう。無意識のうちに支配されている母親との関係が、彼女の中で整理され

ない限りは、

「ごめんさい、自分のことばかり話して」

流子の言葉に、絵里は首を横に振る。

「余計な事はかり話して、一番肝心なお話が後回しになってしまいました。そう、まず、お詫びしなければいけませんでした。五年前の無言電話と失礼な電話、お許しください」

流子は深く頭を下げた。

「寛さんの話を聞いているうちに、奥さまがわたしの中で無視できないくらい大きくなってしまつて……。わたしは時々自分がコントロールできななんです。寛さんにはずいぶんと助けていただきました」「そうですか」

「昨日、本当に久しぶりに寛さんから電話がありました。奥さまへの伝言を頼まりました。時期が来たら必ず伝えてくれと言われました。それはずっと先のことかと思っていました。が、さつき、わたしが奥さまに電話する少し前に連絡が入つて、出来れば今日伝えてくれなにかと頼まりました」

絵里はふいに現実引き戻された。いなくなつた夫と唯一繋がりのある人が、今、目の前にいるのだ。

流子の夢 5

流子はテーブルの上に両手を出し、綺麗な形に指を組んだ。そして口の中で何かを呟き、納得したように顔を挙げて、絵里をまっすぐに見つめた。「それでは、寛さんが言つたその

ままにお伝えします」

流子はふーっと二つ息を吐いた。

「ぼくは終わりの夢にいる」

そう言つと、絵里を見つめた。

絵里は続く言葉を待った。しかしそれきりだった。「終わりの夢？」

「はい、寛さんはそう言いました。それだけ言えば分かるのだそうです」

「家には彼の伝言も置いてあったの。どつしてそこに書かないで、あなたに言わたのかしら」

「わたしが思うに」

と、流子は小さく一つ咳をした。

「寛さんは奥さまとわたしを引き合わせたかったのだと思います。奥さまにずっと誤解されたままという状態が辛かったのではないのでしょうか」

「誤解……」「はい、そうです」

流子は頷く。

綺麗に澄んだ目だ。寛は自分にこれを見せたかったのだらう。

真実を事実として受取るのに、多くの説明はいらない。例えばクリスマス、キリストだってそうだ。いくら彼が奇跡を見せても、信じない者は信じなかった。そうやって人は分かれていくのだ。

もしも寛から、流子とは男女の関係はないと聞かされても、絵里は信じなかつただろう。

「わたしはさっきも少しお話しましたが、時々、自分が手に負えなくなつてしまつて……壊れるんです。自覚はあるんです、でも、抑えられない。そんな時、何度が奥さまにお電話しています。責任のがれしているようで申し訳ないのですが、それが真実です。それで、お詫びしたかったです。許していただけなくても、その機会をくれた寛さんに感謝しています」

流子はまた深々と頭を下げた。「顔を挙げてください。私も、あなたとお会いできてよかつた」

嬉しいです、そう言つていただけると」

流子は少女のように笑つた。

「寛さんは、奥さまを待っているのでしょうか、そこで」「どこですつて？」

「終わりの夢で……ではないのですか？」

流子はまた微笑んだ。

流子の夢 6

「終わりの夢というのが何なのか、勿論、わたしは知りません。でも、寛さんにはとても大切なものなのでしょうね」

絵里にはまるで見当がつかなかった。

「ぼくは終わりの夢にいる……」

流子に託した自分への伝

言を、絵里は口に出して呟いてみる。

終わりの夢。どこかで聞いたことがあるような気がする。でも、それだけだ。

自分は寛の何を知っているのだろう。

ホテルマンという仕事上、勤務時間が不規則だから、絵里とはどうしてもずれ違いが多くなった。その上に、度を越した寛の飲酒

「もう長い間、夫とはきちんと話をしてないの。何かを話し出すと、きつと深刻になって別れる事になるんじゃないかと、何となく避けていたというか、いや、そういうエネルギーもなかった、といった方が正しいかしら。別れてもいいし、このままでもよかった。だから、敢えて蓋をして見ない振りしていた。

あなたのことね、一言も話し合っていないのよ。私は夫がカワムラ・リュウコという女性と関係を持ったと信じていたし、夫はそう思われているのを知っていた。私達はそこから一歩も動いてないのね」

絵里は酒で濁った夫の目を見るのがいやだった。そういう目で彼が見るもの、感じるものを受け入れたくなかった。かといって積極的に拒んだわけでもない。ただ、どうでもいいやとやり過ごしてきただけだった。

「夫はあなたにどんな話をしたの?」

「色々あります……、そう、奥さまのこともよく話してく

れました。写真を見せていただいていますから、今日もこの人ごみの中で見分けられる自信はありました。夢の話もしました。終わりの夢、というのは分かりませんが、奥さまとも昔はよく夢を話したと言っていました」「もう思い出せないくらい昔のことよ」

夫といえば、酒を飲んでいる背中しか思い出せない。

「あの、少しお時間いただけますか? その夢と関係あるかどうか分かりませんが、今、寛さんが言っていたことでちょっと思い出したことがあって」

ふいに、流子が明るい声を上げた。

「ここからそんなに遠くない所で、是非、お見せしたいものがあるんです」

「これからですか?」

「ええ、わたしの車で。あまり時間かからないですし」

「どんな場所?」

「家です、からっぽの家」

流子の夢 7

流子のいう「からっぽの家」は、ホテルから車で十分ほどの高台にあった。「さあ着きました」「ここです」

流子は車を駐車場に入れて、エンジンを切った。

白いゾートマンシオン風の建物だった。

「ここは温泉が出るんです。それで別荘代わりに都会の人な

んかが買っているみたいですよ」

彼女はバッグの中から鍵を取り出した。

「東京にいる伯父が、最近ここを買ったんです。中古ですけど。今、改装中なんです。わたしがホテルに入っている業者さんを紹介したもので、出来るまで頼むと、こうやって鍵を持たされて管理を任されています」

最上階の七階に、その部屋はあった。

「さあ、どうぞ」

ドアを開けて電気のスイッチを入れると、そこは本当に見事な、からっぽの部屋だった。広さは三LDKだというのが、まだ仕切りがない。がらんとしたただの白い箱だった。

「ホテルのフロントには、様々な人がやって来ます。昨日は、洗面所でダイヤのピアスをなくしたから、すぐに排水パイプを外して調べてくれという方が来られて。ちょうど係りの者が外出したばかりの時でした。しばらくお待ち下さい、なるべく早く責任を持つてお探しますと何度申し上げても、今すぐにと興奮して大声を出されて、拳句の果ては過呼吸ですよ。うか、息が出来ないから救急車を呼んでくれと、大変な騒ぎでした。

接客業というのは、勿論、悪いことばかりではありません。でも、自分がだんだん削り取られてしまうような気持ちになることが、たくさんあります。勿論、わたしは、ということですが、だからわたしは、自分を何かに明け渡して、自分を

守ってきました。

昨日、わたしはこの部屋に、張替えたばかりの床を確認しにきたんです。仕事が終わってから、やっぱり今くらいの時間です。

鍵を開け、この何にもないからっぽの部屋に入ったとたん、突然、何かがすんと自分の中に落ちてきた。わたしの何かと結びついたんです。

それは不思議な感覚でした。わたしはしばらく動けませんでした。でも、やがて分かりました。からっぽは、わたしでした。

わたしは、からっぽになつていたんです。自分を明け渡した何かに、食い尽されていたんです。食い尽されて、がらんとなくなつていたことが、はつきりと分かりました。」

流子の夢 8

流子は絵里を振りかえつた。そして南に向かって大きく開いている窓際に立ち、「こちらにどうぞ」

絵里を手招きした。

彼女の隣に立つて、絵里は思わず声を上げた。

目の前に、巨大なサンタクロースと樅ノ木が光っている。斜め下に見える、あれは建築現場だろうか、そこに巨大なイルミネーションが出現していた。

流子が部屋の明かりを消した。

「あの建物を造っている社長さんが、期間限定の贈り物と言っていました。さつき奥さまがホテルの外にあるツリーをずっと見ていらしたので、これもきつと喜んでくださるかと思いました」

肩を並べ、しばらくの間、暗闇のなかで白く輝く大きな袋を担いだサンタクローズと、その横の三段になった樫ノ木を見ていた。

「急に、わたしは寛さんを思い出しました。むかし寛さんから聞いた、夢の話です。奥さまもご存知の話がもしれませんか。」

小さな頃、寛さんは熱を出すと、コンクリートに押し潰される夢を見たそうです。大きな塊が上から落ちてきて、自分にはぺしゃんこになるんだそうです。押し潰されるのはとても苦しかった。

小さな子供はよく熱を出すものです。その度に押し潰されて苦しいので、どうすれば苦しまないで済むのか、彼は一生懸命に考えました。そして、自分の中身を取り出すことを思い立ちました。自分から脱け出せば、潰されるのは抜け殻だから。

そんな想像をよくしていたせいか、今度は、自分の中身がなくなる、自分からっぽになる夢を見るようになったと、寛さんは言いました。大人になってからも、しばしばからっぽの夢は見るのだそうです。年を重ねるごとに、抜け殻の自

分をみる夢が、悪夢になってきていと言っていました」

「ご存知かもしれないけど、夫は若い頃に放浪生活をしていたの。私と結婚することで一つの場所に定住するようになった。そう約束したから、それは夫にとって、すごく苦痛だったのかも知れない、自分の中がからっぽになるくらいに」

「寛さんは好きで放浪していたのではないと思います」

「彼はそんなこと言っていた？」

「いえ、でもわたしには分かります。寛さんはきつと中身を探していたんです。本当の自分を取り戻したかったんだと思います。今になると分かります」

流子の夢 9

一階に下りて、改めてイルミネーションがある建築現場の前に立つてみる。そしてまた、流子と二人並んで、輝くサンタクローズと三角の樫ノ木をしばらく見上げる。「わたしの夢の話聞いていただけますか」

流子が前を向いたままそつと言つた。

「わたしはもう一度、母の胎内に戻りたかったです。そして、もつといい遣伝子をもらって、母が望んでいた自分になりたかったんです」

彼女は絵里を見て笑った。

「どうぞ、おっしゃってください。遠慮なさらないんです」

絵里は意味が分からずに、首を傾げる。

「なぜそんなに母親に拘るのか、あなたの人生はあなたのものなのに。……奥さまはそう思ってたっしょ。違いますっ」「ユウウツ」

「寛さんがそう言っていました。母の胎内に戻りたいなんて、そんなことをうちの奥さんが聞いたら、きつとこう言うよって」

物事には全て明確な答えがあると確信している人間、正しいものと間違っているものをきちんと分けられる人間だと、いつの間にか夫は自分をそんなふうに見ていたのかもしれない。

少なくとも夫にとっての自分は、ある時期からそんな存在だったのかもしれないと、今、絵里は思つた。

「たぶん、違つと思いますよ。私はそんなふうには答ええないわ」

絵里は心えた。

「ただ、悲しいなと思つただけです」

その言葉に、流子はびくつとしたようにこちらへ顔を向けた。

「どつしてですか？」

「何？」

その強い反応に、絵里の方が驚いた。

「びっくりしました」

流子は胸を押さえて言った。

「同じことを言った人がいるんです。幼なじみなんです。彼が、同じことを言ったので」

彼女が夢の話をしたのは、これまでに三人だけだという。

一人目が寛、二人目がその幼なじみ、そして絵里。

「どんな人？」

「とても不思議な人です。彼とは幼稚園から中学まで一緒にした。去年のクラス会で久しぶりに顔を合わせて以来、時々逢つてますが」

流子の夢 10

「彼は不思議な体験をしている人なんです」 心持ち首を傾げて、流子は言つた。

「片山くんは、それが幼なじみの名前なんです。彼は昔から不思議な子供でした。人は誰でも待合所へ行かなければならない、ばくは待合所を知っているんだ、誰にでも話すわけじゃないと言っていました。わたしがそれを最初に聞いたのは、小学生の時でした。彼に選ばれた数少ない一人というわけです」 その前置きして、流子は語り始めた。

「片山くんが待合所へ行ったのは、幼稚園の年中組みの時でした。彼には二歳違いの弟がいますが、その子は喘息持ちで入院を繰返すような身体の弱い子でした。ですから、お母さんはいつも弟につきっきりのような状態でした。その

日、朝起きた片山くんは頭痛と少しの吐き気を感じました。熱を計ってもらつと、平熱だと言われました。ちょうど弟の定期検診がある日で、お母さんは朝早くから弟を連れて、家を出なければならなかつた。昼過ぎには帰つて来るから、それまで静かに寝ているようにと言われて、彼は一人で居間に寝ていました。熱もないし、ただの疲れだろうとお母さんは思つたようでした。

片山くんは言われたとおり布団に入って、しばらくうとうとしていたのですが、お腹の具合が変になつて目を覚ましました。

胃の辺りに、ぐうつと張つてくるような気持ちの悪さがあります。それがしだいに強くなつてきました。やがて、猛烈な吐き気が襲つてきました。もし吐きたくなつたらここに、お母さんが置いていってくれたスーパのゴミ袋を持って、彼はその中に何度も嘔吐を繰り返しました。

吐き出してしまえば気分は良くなつてくるものですが、その時は、いくら吐こうとしても、胃の中からは何も出てきてくれません。待つていたように後から後から吐き気ばかりが襲つてきます。冷たい汗が額から出てきて、頭のてっぺんから自分が冷たくなつていくのが分かつたそうです。

そのうちに、片山くんの目の前が白くなりました。目が見えなくなつたと、彼はそう感じたそうです。だから怖くなつて、布団の上に乗つ伏して、しっかりと毛布をつかみました。

たすけてくれ、死んじゃう。

次の瞬間、それは本当に次の瞬間だそうです。片山くんは病院のベッドの上でした。いつも喘息の弟がしているような酸素吸入器を当てられていた彼を、両親が心配そうに覗き込んでいました。

流子の夢 11

「ごめんね一人にして、こんなに苦しい思いさせちゃつて、これからはずっとそばにいるから。お母さんが言いました。片山くんは嬉しくて涙が出ました。これこそ、彼がずっと望んできたことでした。病気になるつて弟のように大事にされたいと、彼はいつも思つていましたから。

片山くんはお母さんの手を握りました。お母さんはいつても弟にしてあげるように、その手を両手で包んでくれました。安心して眠りなさい。

片山くんの頭を撫でながら、お父さんも言いました。

彼はお父さんに言われた通りに目を閉じました。こんなに安らかな気持ちになつたのは、生まれて初めてでした。両親の愛情を身体中で感じました。愛情というのは、こんなに人も人を自由にするのだと、心から思いました。勿論、小さな子供がそんなふうには理解できたわけではありません。後になつて言葉を当てはめたそうです。彼はそれまで、ずいぶんと不自由な思いをしてきたのでしょう。

そうして片山くんは眠つたのでしょうか。

次に目を開けると、彼は自宅の居間にいて布団の中でした。弟が彼の隣でテレビを見ていました。ずいぶん楽しい夢をみてみたいねと、お母さんが言いました。後から聞くと、母親が帰宅した時に、片山くんは毛布を握り締め、横になって眠っていたそうです。その寝顔があまりに嬉しそうなので、お母さんはしばらく見入っていたとのことでした。

流子は言葉を切つて、絵里を見た。

「片山くんも、自分は夢をみたと思つたのです。夢とは思えないほどリアルだったけど、子供だったから、楽しそうな夢をみたと親に言われればそうかなと。」

「どこが不思議か、ただの夢じゃないかって、そう思いますでしょ。これには続きがあるんです。最後までお話ししていいですか?」

「聞かせてください」

絵里が応える。

「彼にはお祖母さんがいます。隣町に一人で住んでいます。その人が、片山くんにその夢の意味を教えてくれたのだそうです。」

お祖母さんも少し変わった人です。

足の裏にはいろいろなものが宿るといのが持論で、夏でも、もちろん電気は入れませんが、コタツを布で覆つてその中に足を入れて守っています。足ツボなど東洋医学的な意味

ではなくて、個人的な体験に基づいているそうです。」

流子は言った。

流子の夢 12

「片山くんは小学生になった夏休みに、一人でお祖母さんの家へ泊まりに行きました。そしてその夜に、熱を出してしまいました。前にも言ったように、お祖母さんは足の裏にはいろいろなものが宿ると、足に拘りを持つている人です。足の裏が全ての出入り口で、全てものはそこを通つて入り、そこから出ていくという考えを持っています。ですから例えば病気の時にも独特な手当てをします。」

片山くんが熱を出したと分かる、お祖母さんは彼をつつぶせにさせて、お尻から太股の後ろを静かにマツサージしはじめました。尻から段々下の方へと柔らかく揉み下げて、ふくらはぎ、足首、最後に足の裏にいきます。それを両足、お祖母さんは何度も繰返します。

はじめはくすぐつたかたのですが、しだいに心地よさに変わり、片山くんは奇妙な感じを覚えるようになります。真夏で暑かったのですが、お祖母さんの手はひんやりととても気持ちよく、病気の熱が本当に足の裏から出ていくふうなのです。

熱は段々に身体の下へ移動していき、やがて足の裏だけが熱くなりました。するとお祖母さんは、その冷たくさらさら

した手で、彼の両足を包み込みました。熱は全て、その手の中に吸い取られました。お祖母さんはその後、バケツに汲み置きしておいた井戸水の中に、長い間手を浸していたそうです。

彼はとても安らかな気持ちになりました。そして、忘れていた夢を思い出したのです。

(ぼく、前にもこういつぶつになったことがあるよ)

片山くんは話しました。

とても具合が悪くなって、目の前が真っ白になったこと、そのすぐ後で病院に寝かされたこと、でも病院へは行っていないくて、それは夢だったと言われたこと、それでも夢とは思えないほどはつきりしていたこと、そして何より、自分が感じた幸福感を、片山くんは初めて言葉にしたのです。両手で彼の足を包み込みながら聞いていたお祖母さんは、やがて手を離してこう言いました。

(そうか、おまえも行ってきたか。そりゃ待合室というもんだ。次々とへ行くために、少しのお休みをするところだつてよ。普通は後戻りの出来ねえところだが、たまにどうしてか帰されることもあるらしいわな)(次のところって?)

(さあなあ、それは誰にも分からねえ。そこまで行って戻ってきたもんは、誰もいねからな)

(おばあちゃんはどつしてそんなこと知ってるの?)

(そりゃ、ばあちゃんもそこへ行ってきたからさ)

流子の夢 13

そして、お祖母さんは話してくれました。(おまえのお父さんは長男だけど、ほんとは兄さんがいただよ。産まれたその日が命日だった。死んで産まれてきただよ。)

昔はみな、子供は自分で産んだもんだ、産婆さんに来てもらってな。今の病院みたいな機械や薬なんかは何にもねえ、うちん中だ。

苦労して初めての子を産んだのに、赤ん坊は泣かなかつた。産婆さんも何だかあわてているようだった。どつしただかと思っているうち、ばあちゃんは何だか寒くなってきた。後から聞いたが、そんなとき血が止まらなくなつてたんだと。覚えているのはそこまでだ。

気がつくと、ばあちゃんは川にいた。川つぶちの大きな丸い石に腰掛けて、足だけ水の中にあつた。石は太陽にあつためられて、尻が温もつて気持ちいい。川底の石が真っ白でな、玉砂利みたいに小さくて丸くて、踏んでいる足の裏が何ともいい気持ちだった。水は透明で、いい具合にゆっくりと流れていた。冷たすぎず温すぎず、極楽だあとと思つたわな。水ん中にある自分の足が、それまで見たことねえくらい、綺麗に白く見えた。

川底の石があんまり綺麗だから、ばあちゃんは水に手を入れて掬い上げてみた。上から見るとただ白いただけだつたのに、

手に取ってみると、黒や茶色、灰色と、そこらに転がっている石と同じ色だった。水を通すと全部が白く綺麗に見えるけどな。

なあんだそうだったのかと、そんな時はあちゃんは分かった。物事は、水を通して見なくちゃなんねえんだ。ここに流れているこの水のように、透明で汚れないものにな。

それとも一つ、忘れちゃなんねえことがあった。人間にとつては、足が特別に大事だつてことだ。それも足の裏だ。足の裏が特別なもんだつてことを、自分は今、教えてもらっているんだと分かった。

どうしてかなんて知らねえ。ただ、そう分かっただけさ。そこには何でもあった。何でもあると、ばあちゃんには分かった。自分が何のために生まれて、この世の中にどついう意味があつて、どうして太陽があつて星があつて空気があるのか、幸せつてもんがどついうもんか。他にもいろいろなこと、ばあちゃんには全部分かった。そういうもの全部にくるまつて、ばあちゃんは幸せだった。ずっとそこにいたかった。

今、そんなとき分かったことを、いちいち詳しく説明してみろつたつて無理だ。もう忘れちゃまった、こつちに戻つたとなにな。覚えてるのは、分かつたつてことだけさ。

流子の夢 14

さあ、あつちへ行こうと、ばあちゃんはその気持ちのいい

石から立ち上がった。あつちがどつちか分からないが、どうしてかそんな時はあちゃんは思った。今、行かなくちゃ、つてな。川中を歩き出そうとした時さ。大きい声で名前呼ばれてな。アイー、アイーつて。母ちゃんの声だ。うるせえなあ、なんであんな大声出すだかと思つて、最初は知らん顔してただ。だけどあんまりいつまでもいつまでもしつこく呼んで、つい振り返つて返事したのが、良かっただか悪かつただか……。気がつくと、布団の中だ。母ちゃんが泣きながらアイー、アイーつてまだ呼んでた。うるせえなあ。そう答えると、今度はもつと大きい声で泣き出した。よかつたよかつた、生き返つたとな。

後になつて母ちゃんに夢の話をする時、三途の川つてのはやつぱりあるんだなあ、そこを渡らないで引き返す人の話がよく聞いてたけどつて、えらい感心してた。おめのお陰でお迎えを楽しみに待てるつてな。

お祖母さんは片山くんに、そんなふうと話してくれたそうです。

その後、お祖母さんは自分がみた不思議な夢の意味が知りたくて、いろんな本を読んで勉強し続けました。夢というものは普通、時間が経てば経つほど細部があやふやになつていくものですが、何十年経つてもお祖母さんの夢は、くつきりしたままで残っているのだそうです。そしてある時からお祖母さんは、自分が行った場所を「待合所」と呼ぶようになった

のです。今風に、臨死体験と言ってしまえば胡散くさい感じに受取る人もいるでしょうが、きつとそういつことなんでしょうね。

「待合所というのは、人それぞれが持っている理想的なイメージや死生感が、反映される場所らしいです。片山くんはきつと寂しい子供だったのでしょうか、病弱な弟に、両親の愛情を取られてしまったと思っていたのでしょうか。だから彼の「待合所」は弟がよく入院している病院で、お祖母さんのそこが川というのは、やはり昔の人らしいですね。三途の川という言葉も、年配の人は日常の中でよく使いますしね。共通するのはとんでもない幸せな気持ちだと、お祖母さんは言っていたそうですが」 流子は言った。

「至福の夢ね」

絵里はしみじみと言った。

「信じるほうですか、こっついう話は」

「自分にとつて遠い話ではあるんですが、そついつこともあるだろつとは思います」

流子の夢 15

「片山くんのお祖母さんは今も健在ですが、その至福の夢で人生観を変えました。足のメッセージを受けとつて、今でも大切にしています」 流子が言つた。

「片山くんはどつつ、」

「自分では分からないと言つていますが、わたしから見ると、彼の不思議な感じというのは、待合所へ行ったことと関係があるのかな、という気がしないでもないです」「不思議な感じつて」

「うーん、うまく言えません。でも、彼と直接逢つて話すとすぐに分かると思います」

絵里はにっこりと笑つた。

「それに比べて、わたしの夢はどこにもいけません。人間はみな母親から生まれています。一生、その事実から離れられないのでしょうか」

母の胎内に戻り、もつといい遣伝子をもらつて、母が望んでいた自分になりたい。それが自分の夢だと流子は言つたのだつた。

生まれたその日に母の夢を壊してしまつた、それからずつと母を裏切り続けていると言つ彼女の三十年という人生は、彼女の母のものだ。母によつて支配されている人生、母に乗つ取られた人生だ。

佐藤健一のように、母親によく似た自分の美しい顔を強く嫌う人間もいる。流子とは全く逆の立場だが、彼もまた、母親のそばに留まつている。親によつて損なわれた子供というのは、大人になつてもその部分だけが成長できないで苦しむ。そんな場所に生きている人間を、絵里はただ悲しいと思つた。

絵里は、流子に抱く悲しみの中に、強い共感があることに

気づく。見捨てられ感情たろうか。流子は母に、絵里は夫の寛に。

絵里にとつての寛とは、何があつても自分から離れない、自分を見捨てないという確信、安心感を持たせてくれた相手だった。どうしてか、絵里にはそう思える唯一の相手だった。しかし今、夫は出ていった。

(しばらく家を出ます。心配しないで下さい)

メモ帳にそれだけ残して。彼の行方を心配するより、寛が自分を見捨てたという感情が強いことに、絵里は気がついていた。

母に見捨てられた娘と夫に見捨てられた妻か。

絵里はそんなふうに使っていた。

「またお会いできる？ 夫のことで色々お聞きしたいこともあるかもしれないし」

「ええ、喜んで」

流子は笑顔を見せた。

健一の夢 1

佐藤健一との三度目の面接日だった。やはりまた、祖父の芳造が待っていたようにドアを開けてくれた。実際、彼は絵里を待っていたのだらう。ドアを開ける彼の表情を見ると

それがよく分かり、何だか嬉しくなる。

「こんにちは、中山です」

芳造にお辞儀すると、彼はあわてたように深々と頭を下げる。その様子が子供のようで可笑しい。

「今日は美知子さんが留守なもんでね」

確か先週も同じことを言っていたと、スリッパを揃えてくれる芳造を見ながら思い出す。彼は絵里に、何かを話したがつているようにも見えた。

ずんぐりとして毛のない頭にいつも茶色い毛糸の帽子をかぶり、大きな鼻をした愛嬌顔の老人に絵里は親しみをもち始めていた。

いつもの位置に座り、健一もまた、絵里を待っていた。

待っていた、と絵里には感じられた。表情が前回に比べて明るかったことと、挨拶の後、初めて彼から口を開いたからだった。

「昨日、いや、今朝、夢を見たんです。会社員だった頃の夢です」

彼は少し早口だった。

「内容は忘れました。僕は新品のスーツを着ていました。営業で外にいました」

「入社したばかりの頃？」

「きつとそつでしようね。目が覚めてから、ああ久しぶりに会社員だった頃の夢をみたなと」